

英語教育

第57号



2026-3

愛媛県教育研究協議会 外国語委員会中学校部会

表紙作品： 砥部町立砥部中学校 3年生 制作

目 次

I	巻頭言		
		愛媛県教育研究協議会外国語委員会委員長 豊島 政一	1
II	第10回愛媛県外国語教育研修会		2
	演題「外国語教育について考える一日」		
		愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 教授 中山 晃 先生	
III	高円宮杯第77回全日本中学校英語弁論大会愛媛県大会		
	○ 実施要領		7
IV	支部だより		12
V	英語委員会各部の活動		
	○ 評価研究部		29
	○ 行事部		30
VI	憩いの広場		
	○ 初任者の声		31
	○ ALT より		45
VII	事務局だより		49
VIII	全英連和歌山大会報告		50
	令和7年度愛媛県教育委員会・愛媛県教育研究協議会外国語委員会（中学校）役員名簿		53
		編集後記 松山市立日浦中学校 片山 信吾	54



I 巻頭言

愛媛県教育研究協議会

外国語委員会委員長 豊島 政一

愛媛県内の英語科教員の皆様の、英語教育の実践に心より敬意を表します。今年度は、記録的な猛暑の日々の連続に加え、全国的なクマの出没及びそれによる被害などの大きな自然環境の変化がございました。そして教育現場にも急激に押し寄せる生成AI（人工知能）の活用の波など、私たちを取り巻く環境は激動の一年となっており、まさに予測困難な時代と言えるでしょう。

しかし、予測困難な時代だからこそ、教育の力、特に英語教育が果たすべき役割は大きいと確信しております。ワールドシリーズでの大谷翔平選手や山本由伸選手の活躍が、国境を越えた感動とコミュニケーションを生み出したように、生徒たちが未来の世界で活躍するための「共通語」としての英語の重要性は、今も変わりません。

今年度は、夏季研修会に、愛媛大学の教育・学生支援機構教育企画室より中山晃教授を招聘し、「外国語教育について考える1日」と題して、ご講演をいただきました。その中で、英語を指導するに当たり、「多様性への配慮」や「ユニバーサルデザインの観点」などについてご教授をいただくとともに、過去に行われていた教授法のオーラルアプローチやパターン・プラクティスなどを参加者で実際に体験し、現代の英語教育へのご示唆をいただきました。演題どおり、「外国語教育を考える1日」にすることができたと実感しております。

また、今年度、私自身が全国英語教育研究大会の和歌山大会に出席した際、大変光栄な言葉をいただきました。出席されていた堺市出身の教頭先生から、2年前の愛媛県大会における素晴らしい取組への感想をいただいたのです。これは、ひとえに愛媛県における外国語教育への熱意の証であり、長年にわたり愛媛県教育研究協議会の外国語委員会を牽引してくださった畦田校長先生、桐山校長先生を中心とした事務局や幹事の皆様、そして何よりも、県内の小学校・中学校の現場で、生徒のために一生懸命に外国語教育に関わっている全ての先生方の絶え間ない努力の賜物であると、心より感謝申し上げます。

さらに、直近の四国英語教育研究大会においても、松山市立垣生中学校の井手先生、愛媛大学教育学部附属小学校の和田先生による一連の示唆に富む実践発表は、私たちに多くの学びと刺激を与えてくださり、愛媛県の外国語教育のすばらしさを再認識させてくれました。

冒頭にも申しましたが、生成AIが教育現場に導入されつつある今、私たちは、「AIに代替されない、人間ならではのコミュニケーション能力」の育成を目指さなければなりません。AIを単なるツールとしてではなく、生徒の英語に関する活動を豊かにし、個別最適な学びを深化させるための「共創的なパートナー」として、いかに授業で創造的に活用していくかが大切です。そして、多忙化が叫ばれる中で、教師の皆様の働き方改革に資する活用法を模索することも、外国語委員会の重要な使命だと考えます。この「英語教育第57号」が、日々の実践を振り返り、新たな一步を踏み出すための羅針盤となることを願ってやみません。外国語委員会は、今後も先生方一人ひとりの研究意欲を支え、学びを共有し、愛媛県全体でより質の高い英語教育を追求していく「連帯の場」であり続けます。皆様のご健勝と、愛媛県外国語教育の更なる発展を祈念し、巻頭言といたします。

Ⅱ 第10回愛媛県外国語教育研修会

○ 講演

「外国語教育について考える一日」

愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 教授 中山 晃 先生

1 講演の主な内容

(1) 前説

- ・自己紹介：茨城県出身、52歳。
- ・初任地は兵庫県山崎町（現 宍粟市）の山間部の高等学校（ソフトテニス部顧問）。昼は高校臨時講師、夜は大学院授業を受講する生活を3年間継続。
- ・ICUで学び、その後大学教員となり愛媛大学に着任。
- ・大学の英語授業の変化：4技能のうちリーディングとリスニングはeラーニング化。スピーキングは1クラス20名程度で対面で実施。
- ・「新しい時代の教養」についての考察。愛媛大学の共通教育科目「課題発見基礎セミナー」にて地域社会と連携した実践的学びを提供。

(2) 本題

- ・小→中学校の移行期における文字情報処理の増加と特別支援的視点の重要性。
- ・特別支援教室での工夫は全生徒対応可能なユニバーサルデザインにつながる。
- ・理解促進の3要素：「視覚化」「焦点化」「共有化」。
視覚化：音声と視覚情報を組み合わせて理解を促進。
焦点化：生徒の特性に応じた情報提供（紙からタブレット活用へ）。
共有化：会話練習を通じた発音・思考の共有。

(3) 授業での生徒のつまずきや指導方法について、参加した先生方の意見

- ・「小学校でももう少し書く練習が必要であると考えますが、文科省は要求していないため必要ないのではと悩んでいる」
- ・「書く練習をどこまで進めるべきか」「アルファベットの大文字・小文字を読み書きできるようになってほしい。アルファベットを聞いて書ける状態で入学してもらえると助かる。」
- ・「教科書を開けない、学習中にどこをやっているのか分からなくなる生徒がいる。教科書を開く練習や、やっている箇所を明示することで対応している。」

【講師からのコメント】

- ・小中接続で特に配慮が必要な部分である。
- ・小学校6年生の2学期頃からは、プリントによる宿題で書く練習を行っている。
- ・小学校の授業は発話中心だが、中学校に入ると長文読解や文法（be動詞、do/doesなど）が始まる。
- ・生徒が「分かる／分からない」を意識したタイミングで、適切に説明や手立てがあるとよい。
- ・しかし現状では「こうしましょう」という明確な取り決めがなく、それが課題となっている。

2 学習スタイルについて

(1) 多様性への配慮

- ・生徒によって学び方は様々であり、その違いを寛容に受け止める姿勢が大切。
- ・個別最適化という考え方にに基づき、生徒の理解の仕方や学びやすさに合わせた支援を提供することが重要。

(2) 支援に対する考え方の違い

- ・一部の先生からは「学びやすさを提供することが、生徒の努力や意欲を奪うのではないか」との懸念がある。しかし、支援は意欲を阻害するものではなく、むしろ学びの核心に結び付けるために必要であるという意見も示された。

(3) ユニバーサルデザインの観点

- ・すべての子供の学びを保証することを目指している。
- ・学びやすさを支えた上で、その後に学びの核心へと結び付ける学習環境の調整・設計が大切。

(4) 教材研究と授業づくり

- ・個人差を適切に理解した上での丁寧な教材研究が必要。
- ・その成果を生かした授業づくりが、学びやすさと学びの深まりにつながる。

(5) 学校全体での取組

- ・接続の段階で生じるつまずきへの手立ては、先生個人に任せるのではなく、学校全体で考え、共有できるとよい。

3 「恩師」である今村茂男先生の紹介と、日本の外国語教育の歴史におけるその功績

(1) 今村茂男先生の経歴：

- ・1922年カリフォルニア州生まれの日系二世。
- ・小学校4年生の時に四国松山へ。
- ・1943年、海軍飛行科予備学生試験に合格。
- ・終戦後、松山へ帰郷。英語の知識を活かし、最初は個人的に英語を教え始める。
- ・英語教師としての手腕を評価され、英語教師や指導主事を務める。
- ・1950年には、「日本語使用禁止の研修」（2週間）といった、驚くべき指導も行っていった。
- ・1951年、ミシガン大学のチャールズ・C・フリーズ先生に師事。
- ・フリーズ先生は当時の英語教育界の権威であり、その指導法を研究した。
- ・愛媛県の英語教育の発展に尽力し、全国でも先駆的な役割を果たした。

(2) オーラル・アプローチの指導原則と変遷

- ・チャールズ・C・フリーズ先生は「オーラル・アプローチ」を提唱したことで有名。
- ・オーラル・アプローチの3つのキーワード：

- ① 模倣と暗記 (Mimicry and memorization)：教師のモデルを真似て繰り返し暗記すること。

- ② パターン練習 (Pattern Practice): 基本的な文型を繰り返し練習し、定着させること。
- ③ 最小対立 (Minimal Pairs): 音の最小単位の違いを識別・発音する練習。

(3) オーラル・アプローチの思想

- ・最終的な目的が外国語を読むことであっても、その言語の基本（構造や音の体系）を習得するためには「話すこと」が不可欠であるとされた。「発話こそが言語である」という考え方が根底にある。
- ・言語を本当にマスターするためにはまず「口頭でマスターすること」が重要視された。
- ・簡単なパターンから自動的に話せるようになるまで練習を重ね、その上で初めてリーディングに進むべきだとされた。

(4) オーラル・アプローチへの批判とその後の変遷

- ・オーラル・アプローチは「機械的で退屈な繰り返し練習」「創造的な活動ができない」「学習者の好奇心や意欲を損なう」といった批判にさらされた。
- ・これらの批判を受け、教科書の内容も変化していった。

4 現代の英語教育への示唆

(1) 指導法の再評価とバランスの重要性

- ・現在の指導法が完璧かといえばそうではない。
- ・過去の指導法（オーラル・アプローチなど）を再評価し、その良い部分を現代の教育に取り入れる柔軟性が必要。
- ・「話すこと」と「文字を読むこと」のバランスが重要。小学校ではまず「聞く」「話す」に重点を置き、その後に「読む」「書く」に進む流れが一般的だが、読解に必要な文字学習との連携が課題。
- ・「練習していないのに話せるようになるか」という根本的な問いに対し、単に「自己表現」を促すだけでなく、基礎的な口頭練習を積み重ねる必要性を指摘。

(2) 完璧な指導法の不在

- ・英語教育においては、昔から「どう教え込んだら良いのか」「何に重点を置くべきか」という議論が尽きず、完璧な指導法は存在しない。
- ・常に新しいものを取り入れながら、発展させていく必要がある。

(3) 意見交換（指導方法の変遷、共通点や相違点について）

- ・「話さない英語は読めない」という意見に共感する。
- ・小学校から中学校への接続を考えると、オーラル（口頭）での練習を継続させることは、子供たちの学習にとって良いつながりになる。
- ・口頭練習に重点を置く一方で、中学校に入ると「書く」ことが求められるため、バランスが難しい。「書く」ことに集中しすぎると、口頭でのアウトプットがおろそかになる可能性がある。

(4) 指導法の課題

- ・オーラル・アプローチは、語彙が限定的になる、創造的な活動ができないといった批判を受けた。
- ・しかし、その背景には、生徒が完全にコントロールできるまで基礎的な練習を徹底的に教え込むという「大前提」があった。これが欠けると、批判されたような弊害が生じる。
- ・現代の小学校の教科書は、この「徹底的な教え込み」の前提がないため、単に「慣れ親しむ」レベルに留まり、中学校での本格的な学習とのギャップが生じている可能性がある。
- ・過去の指導法を盲目的に批判するのではなく、その背景や意図を理解し、現在の教育課題に合わせて良い点を「つまみ食い」する視点が重要である。完璧な指導法がない中で、教師は常に試行錯誤し、学習者の実態に合わせた最適なバランスを見つける努力が求められる。

5 教授法を再考する 「実際の指導書でパターン・プラクティスを体験！」

本時の学びのポイントは「所有格」。フレームを見ながら、教師のまねをして発音する。そのときの注意点は、イントネーションとリズムに気を付けること。

【3～4人のグループで体験】

発音の仕方（イントネーションとリズム）が図示されているので、視覚情報の方が頭に入りやすい生徒にとって、どのように発音するか分かりやすくなっている。文法の解説は、母語で行う。次に、生徒の教科書は閉じさせ、ダイアログの練習をする。教師が、教科書にある質問+αを順番にしていき、生徒はその質問に答える。今回は、Where や前置詞などの既習表現を使って答えなければならない。その後、生徒が先生に質問をする→生徒同士の会話練習の順で練習する。

【3～4人のグループで体験】

最後にセクションbで、所有格が丁寧に説明されている。当時の教科書は、スモールステップを意識しており、順番に分かりやすく、生徒に気付きが与えられるように教材が作られていた。言語習得の順番を意識していた。

(1) 生徒の第一言語の使用について

「オーラル・アプローチ」では、生徒の使用する言語はできるだけ避けられるが、説明が十分に理解されていることを確認する必要がある場合には、生徒の第一言語が使用されていた。

(2) 佐野氏による指摘

「オーラル・アプローチ」では、本来、patternの習得には事前に文法の説明をせず、多くのpattern practiceを行うことが特徴で、生徒は機能的に学ぶことになるが、日本にこのアプローチが導入された際には、誤用が見られ、先に文法の説明を行ってから、文脈を無視した機械的なpattern practiceが行われたことで、現場の活動は無味乾燥なものとなってしまった。」

「目標言語を創造的に使うことは重要な目標であるが、学習初期から実現できるわけではない。そのためには、最初にpattern practiceやguided compositionも必要である。言語に対する理解が深まり、新しい構文に慣れた段階で、自己表現やコミュニケーション活動を

行うことで、オーラル・アプローチの限界を補うことができる。」

(3) 30～40年前によく行われていた授業の流れ

「導入」「練習」「解説」「読解」「発展」「表現」の流れで行われていたが、後半の「発展」「理解」は時間の制約で省略されることもあった。

「今はどのように50分間を構成しているか。どのような教授法、アプローチ、テクニックで授業を進めているか。」

上記の問いについて、参加者で意見交換をした。

(4) 代表者の意見

- ・自己表現に力を入れたい。自分の考えを言える、書けるようにするには、適切な pattern practice を通して生徒に自信を付けさせ、表現活動につなげたい。
- ・身近な話題を選ぶことで、生徒も親しみやすくなる。
- ・英語を教えていく上で、インプット、アウトプットの量が大切。教科書の特色を生かしつつ、研究を進めたい。
- ・AI の発達に伴い、テクノロジーの発達によって今後もいろいろな教授法が生み出されることが想像できるが、過去から学べるものがたくさんあると再確認した。今回の貴重なお話から、50年前にすばらしい英語教員がいて、愛媛に新しいノウハウを広めていただいたことを知った。現在、県内の教職員の年齢層も二極化する中で、意見交流し合える、指導の方法について学び合える機会がこれからより大事になってくるのではないかと思った。

6 まとめ

本来、英語教育は生徒にどのような力を身に付けさせるべきかをよく考えて教材研究を深めることが求められる。大学生に勧めているツール、愛媛大学での e ラーニングの導入については、オンラインでやること、対面でやることの意義を大切にしている。今後の先生方は、AI を適切に利用しながら、英語教育を頑張ってほしい。

Ⅲ 高円宮杯第 77 回全日本中学校英語弁論大会愛媛県大会

○ 実施要領

- 1 日時： 令和 7 年 9 月 20 日（土） 9:00 開始
- 2 会場： エスポワール愛媛文教会館
- 3 日程
 - ① 受付
 - ② 開会式
 - ・ 主催者あいさつ
 - ・ 役員及び審査員紹介
 - ・ 諸連絡
 - ③ 弁論 28 校 28 名
 - ④ 表彰式
 - ・ 審査員講評
 - ・ 結果発表
 - ・ 表彰

第 1 位	愛媛県立今治東中等教育学校	3 年生
第 2 位	今治市立立花中学校	3 年生
第 3 位	新居浜市立別子中学校	3 年生

< 会場 >



IV 支部だより

四国中央支部

四国中央市立三島東中学校 伊藤 由美

1 はじめに

令和7年度の四国中央支部は、中学校7校の英語科教員で活動しています。各中学校と校区内の小学校にALT9名が派遣され、ALTとのチームティーチングで授業を進めています。

2 活動内容

(1) 研究主題

コミュニケーションを図る資質・能力の育成

一五つの領域における総合的及び統合的な言語活動を通して一

(2) 活動計画

月	行事	内容
4	市小中合同教科等部会	・研究主題の決定、研修計画の立案
5	市教科等研究会事前打合せ会	・授業内容、研究の視点、研究協議の柱等の確認
6	市教科等研究会（中学校）	・川之江北中での研究授業、研究協議 ・タブレット端末の有効な活用方法について、自己評価表についての情報交換など
8	第10回愛媛県外国語教育研修会	・小中の接続、「会話の構造」「聞き取りと発音の指導の必要性」「英語教授法（オーラル・アプローチ）」についての研修
	イングリッシュキャンプ	・市内の行政施設にて実施
9	市教科等研究会（小学校）	・北小学校での研究授業、研究協議 ・小・中連携に向けての情報交換、意見交換
11 12	四国中央市中学生海外派遣事業	・ニュージーランドでの体験型英語学習プログラム研修を実施予定
2	研究のまとめ	・活動のまとめと反省

3 おわりに

今年度は、「市教科等研究会」の在り方、授業者の決定方法等について見直しを進めています。各校、教職経験年数の二極化が大きい中、年齢層、経験年数の偏りや異動等もあり、従来の方策であると、授業者が固定されたり、公開授業を担当する教員の大きな負担になったりするなど、課題が目立つようになりました。そこで、会場校や授業者の負担軽減を踏まえた公開授業の在り方、指導案の提示、日々の指導に役立つ情報の共有など、改善策を練っているところです。

また、本市では、ICT機器を有効活用し、個別最適化された指導実践に努めています。デジタル教科書や1人1台端末を用いたドリル教材、学習支援アプリ等を効果的に活用した授業実践が行えるよう、研修を継続し、より充実した英語教育を目指します。

新居浜支部

新居浜市立中萩中学校 宇野 恵

1 はじめに

令和7年度の新居浜支部は、中学校12校の外国語科教員32名で活動しています。今年度は7名のALTと共に英語教育の向上を目指しています。

2 活動内容

(1) 研究主題

コミュニケーションを図る資質・能力の育成

一五つの領域における総合的及び統合的な言語活動を通して一

(2) 活動計画

月	行 事	内 容
4	英語主任会	・会長、副会長、幹事の決定 ・研究目標、活動内容の決定
6	学力向上研修会	・角野中学校による公開授業 ・研究協議（授業研究と各校の実践報告）
6	新居浜市英語スピーチコンテスト 実行委員会	・スピーチコンテストについての協議 ・役割分担の決定
7	第10回愛媛県外国語教育研修会	講師 愛媛大学 教育・学生支援機構教育 企画室 教授 中山 晃 先生 講演「外国語教育について考える1日」
8	新居浜市 English Summer School	講師 愛媛大学 非常勤講師 河野 極 先生 ・講師による特別講座、大学生やALTによる分科会講座を市内中学生59名が受講
9	高円宮杯 全日本中学生英語弁論 大会 愛媛県大会	・各校有志による参加
10	新居浜市英語スピーチコンテスト マドンナレシテーションコンテスト	・各校有志による参加
12	新居浜市英語科同好会冬期研修会	講師 愛媛大学教育学部 リテラチャー・サークル研究会 教授 立松 大祐 先生 講座 リテラチャー・サークル

3 おわりに

言語活動においては「目的・場面・状況」を明らかにすることを重要視し、生徒が目的を持って取り組むことができる言語活動の場を設定していきたいです。また、夏休み中に多くの先生方の取組について学んだことを生かします。リテラチャー・サークルやオンラインで他校の生徒と英語でコミュニケーションを図る取組を通して、コミュニケーションを図る資質・能力の育成に努めていきます。

西条支部だより

西条市立西条南中学校 教諭 村上 太朗

1 はじめに

令和7年度の西条支部は、中学校10校の英語科担当教員27名で活動している。より質の高い英語教育の拡充を図るために、ALTが計19名配属されている。

2 活動内容

(1) 研究主題

コミュニケーションを図る資質・能力の育成
一五つの領域における総合的及び統合的な言語活動を通して一

(2) 活動計画

月	行事	内容
4	第1回外国語科主任会	・委員長、副委員長の決定 ・研究主題の決定、研修計画の立案
8	第1回教科研修会	・研修「ICTを用いた言語活動の実践事例紹介」 各校の代表者1名が授業で実際に使っている教材や教具、ワークシート、タブレットの活用法等の紹介
10	第2回教科研修会	・研究授業 授業者 西条市立西条東中学校 教諭 柴田 健吾 ・研究協議 ・次年度への課題確認
2	研究のまとめ	・活動のまとめと反省

3 おわりに

近年タブレット端末やデジタル教科書の導入など、授業のICT化が進んでいる。しかし、英語教育におけるデジタル教材を用いた教授法が確立されておらず、どのように活用していくべきか模索する日々が続いている。この現状をふまえ、今年度の夏季教科研修会では、「ICTを用いた言語活動の実践事例紹介」と題し、各校1名の教職員による授業実践の共有を行った。2学期すぐにでも実践できる実践例が多くあり、さらには生成AIの活用など新たな発見が多く、充実した研修となった。今後も研究授業や研究協議を重ね、アナログとデジタルのベストミックスを実現し、より良い英語教育を目指して研究を進めていきたい。

今治・越智支部だより

今治市立朝倉中学校 教諭 羽藤 りえ

1 はじめに

令和7年度現在、今治・越智支部には中学校17校、小学校30校がある。外国語委員は小・中合同で活動をしており、中学校の委員が委員長、小学校の委員が副委員長を務め、連携して研修を進めている。今年度は、3年に一度の今治・越智教科等研究大会が開催される年であり、愛媛大学教育学部との連携協力事業の下、夏季研修会や4回にわたる打合せ会、また事前授業研究会などを中心に、大学の先生方から指導や助言をいただく場を設け、授業研究に取り組んでいる。

2 活動内容

(1) 研究主題

目的・場面・状況に応じて自分の考えなどを伝える力を育成する指導の工夫
—ICTの効果的な活用を通して—

(2) 活動計画

月	行事	内容
5	今治市教育研究所教科等研修委員会	・研究目標の決定 ・研修計画の立案
	今治市・上島町教科等研究大会推進委員会	・教科等研究大会に向けた推進計画の共有
6	教科等研究大会第1回打合せ会	・教科等研究大会に向けた授業づくり
7	教科等研究大会第2回打合せ会	・教科等研究大会に向けた授業づくり
8	小・中合同夏季外国語科研究会	・小中連携を意識した言語活動の在り方 (愛媛大学教育学部立松大祐教授による講話) ・言語活動の実践発表
	教科等研究大会指導案審議	・教科等研究大会に向けた授業づくり
9	教科等研究大会第3回打合せ会	・教科等研究大会に向けた授業づくり
	教科等研究大会第4回打合せ会	・教科等研究大会に向けた授業づくり
10	教科等研究大会事前授業研究会	・教科等研究大会に向けた授業参観及び指導方法の改善(愛媛大学教育学部立松大祐教授による指導助言)
11	今治・越智教科等研究大会	・研究授業の参観及び研究協議(愛媛大学教育学部立松大祐教授による指導助言)
2	研究のまとめ	・今年度の研究のまとめと反省

3 おわりに

今年度の小・中合同夏季外国語科研究会では、3名の教員による言語活動の実践発表があり、有意義な研究会となった。また、立松教授による講義では、つながりを意識した指導の大切さを改めて実感した。11月の今治・越智教科等研究大会に向けて、生成AI等のICTを活用した言語活動について研修を深めている。目的に応じた活用方法を模索しながら今後も研修を積み重ね、学び続ける教員集団を目指したい。

松山支部

松山市立勝山中学校 高田 真奈実

1 はじめに

松山支部には 29 校の中学校があり、県下では、学校数、英語科教員数が多い状況にあるため、松山市としての取組に差ができる可能性があります。そこで、各校の英語科主任 1 名を通して、各校における英語教育の取組について情報交換を行い、研修の充実を図るとともに、学校間で格差が生じないように努めています。今年度は、松山市教育研究協議会（以下「市教研」）の 3 年次研修に向けて指導案を作成し、各校での授業実践を通して課題を共有することで、指導力の向上を図りました。また、全英連和歌山大会や四英研高知大会など、県外の英語研究会にも数名が参加し、全国や他の地域の実践を知るとともに、他県の先生方との交流を図ることができました。これらの経験を今後の授業づくりや研修活動に活かしていきたいと思えます。

2 活動内容

(1) 努力目標

コミュニケーションを図る資質・能力を育てる授業の創造

- ① 思考力・判断力・表現力を育む指導の工夫（統合型言語活動を通して）
- ② 「学びに向かう力」を育む指導と評価の在り方

(2) 活動計画

月	行事	内容
5	第 1 回英語科主任会 第 1 回市教研大会運営推進委員会	・会長、副会長、幹事の決定 ・今年度の取組についての確認 ・市教研大会 3 年次研修の運営等について
7	第 2 回英語科主任会 第 10 回愛媛県外国語教育研修会 (第 15 回愛媛県小学校外国語活動研修会、第 47 回愛媛県中学校夏季英語研修会)	・市教研大会 3 年次研修にむけての指導案作成 ・講師 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室教授 中山 晃 先生 演題「外国語教育について考える 1 日」 研修会への積極的参加及び運営協力
11	市教研大会 2 年次研修 全英連和歌山大会	・市教研大会 3 年次研修に向けての指導案作成（幹事のみ） ・英語科主任会からの参加
12	四国英語教育研究大会 (高知大会)	・英語科主任会からの参加
1	第 3 回市教研大会運営推進委員会	・研究の記録について ・3 年次研修に向けてのまとめ
2	第 3 回英語科主任会	・1 年間の取組について ・令和 8 年度の研修の方向性等

(3) 市教研 3 年次研修に向けて指導案作成

第 2 回英語科主任会において、来年度予定されている授業公開に向けて、指導案の作成を行いました。授業の展開や評価の在り方、単元計画などについて意見を交わし、授業のねらいなどを共通理解することができました。また、単元全体の目標や各授業の流れについても話し合い、授業改善の視点を共有しながら、互いに学び合う機会となりました。来年度の授業公開に向けて、各校で授業実践を行い、さらに研修を積み重ねていきたいと思えます。

3 おわりに

今年度は、主任会や各種研修を通して、授業改善に向けた協働的な取組を進めてきました。特に指導案作成では、授業の展開や評価の在り方について深く議論し、来年度の授業公開に向けた準備を進めてきました。今後は、授業実践を重ねながら、生徒の学びを支える授業づくりを継続したいと考えています。

東温支部

東温市立重信中学校 馬越 成輝

1 はじめに

東温支部には7つの小学校と2つの中学校があり、外国語委員会は、小中合同で活動しています。学校同士で互いに協力しながら、より良い指導法や授業のアイデアを共有し、授業を参観し合うことで、指導力の向上を図っています。また、東温市には英語検定の受験料を補助する制度があり、生徒が英検に挑戦しやすい環境が整っています。

2 活動内容

(1) 研究主題

コミュニケーションを図る資質・能力の育成
—五つの領域における総合的及び統合的な言語活動を通して—

(2) 活動計画

月	行事	内容
4	東温市春の教育研究集会	・委員長、副委員長の決定 ・研究目標、研究計画の立案
7	第10回愛媛県外国語教育研修会 (第15回愛媛県小学校外国語活動研修会、第47回愛媛県中学校夏季英語研修会) ※東温市夏季研修会と兼ねる	・講演 講師 愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 教授 中山 晃 先生 演題「外国語教育について考える1日」
9	英語力向上講座	・英検3級受験者対象の動画配信
10	マドンナレシテーションコンテスト	・中学生有志による参加
1	東温市教科研修会	・取組紹介 ・情報共有
2	研究のまとめ	・今年度の研究のまとめと反省

3 おわりに

昨年度は、東温市教育研究会が実施され、小中連携の一環として、小学校外国語科の授業を参観した上で研究協議を行いました。今年度は研究授業の機会はありませんでしたが、小学校と中学校の市内教員が集まる教科研修会を開催しました。研修会では、小学校教員による全国大会での研究発表の紹介や、日々の授業に関する活発な情報共有が行われました。

今後も小中学校間の連携を深め、各校との情報交換や授業交流を継続することで、より充実した教育活動を展開できるように努めていきたいと思います。

伊予支部

伊予市立双海中学校 高城 有佳

1 はじめに

伊予支部は8校の中学校と16校の小学校で構成されています。外国語委員会は小・中学校が合同で開催しており、中学校の委員が委員長、小学校の委員が副委員長となり、英語教育の推進にあたっています。小中連携を図りながら研修や情報交換を行い、児童生徒のコミュニケーション能力の向上に努めています。

2 活動内容

(1) 研究目標

コミュニケーションを図る資質・能力の育成

ー五つの領域における総合的及び統合的な言語活動を通してー

(2) 活動計画

月	行事	内容
4	伊予地区教科等研究集会	・委員長、副委員長、常任委員の選出 ・研究目標の決定、研究計画の立案 ・情報交換
7	第10回愛媛県外国語教育研修会 (第15回愛媛県小学校外国語教育 研修会、第47回愛媛県中学校夏季 英語研修会) ※伊予地区外国語主任会と兼ねる	・講師 愛媛大学教育・学生支援機構 教育企画室 教授 中山 晃 先生 ・演題 「外国語教育について考える 1日」
8	英語力向上講座 支部だより	・英検3級受検者対象の動画配信 ・支部だよりの作成
2	研究のまとめ	・今年度の研究のまとめと活動の反省

3 おわりに

今年度は、伊予地区の夏季主任研修会を第10回愛媛県外国語教育研修会と兼ねて行いました。中山先生の御講演では、「パターンプラクティス」を活用した新出文法の導入について学び、1人1台端末の活用などを推進している今だからこそ、昔からある指導法を見つめ直す重要性を考えることができました。今後も、児童生徒の更なるコミュニケーション能力の向上を目指し、小中連携に努めながら研修を重ねていきたいと思います。

上浮穴支部

久万高原町立美川中学校 川西 奈緒

1 はじめに

上浮穴支部には中学校2校、小学校9校があり、そのほとんどがへき地校である。久万中学校区には5校、美川中学校区には4校の小学校があり、久万高原町教育委員会には2名のALTが所属している。久万高原町では、英語検定受験者に対する補助金制度があり、挑戦しやすい環境が整えられている。文部科学省が掲げているCEFR「A1」（英検3級相当）の英語力を身に付けさせるために日々研究を重ねている。

2 活動内容

(1) 研究主題

コミュニケーションを図る資質・能力の育成
ー五つの領域における総合的および統合的な言語活動を通してー

(2) 活動計画

月	行事	内容
4	上浮穴郡教職員研究推進委員会	・委員長、副委員長の決定 ・研究目標、活動内容の決定
7	第10回愛媛県外国語教育研修会 (第15回愛媛県小学校外国語活動研修会、第47回愛媛県中学校夏季英語研修会)	・講師 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 教授 中山 晃 先生
8	第1回上浮穴郡外国語夏季研修会	・講師 愛媛大学教育学部 教授 立松 大佑 先生
11	第2回上浮穴郡外国語秋季研修会	・講師 高知大学人文学部 教授 村端 五郎 先生
	上浮穴郡外国語部会	・外国語教育における小中連携について
2	研究のまとめ	・今年度の研究のまとめと活動の反省

3 おわりに

本支部には、小規模校であるからこそできる活動や交流がある。しかし、小中連携が十分でないことや、小規模校のため、各校での英語でのコミュニケーションの機会が限られているという課題もある。これらの課題を解決するために、小中で共通のSmall Talkトピックを作成したり、中学校の教員が小学校の外国語の授業でT2に入ったりするなど、9年間の一貫した英語教育を行うために、連携をより密にして行くことが大切である。また、英語でのコミュニケーションにおける目的・場面・状況の明確化を図り、生徒が楽しいと感じられる言語活動の充実を小・中学校ともに進めていく必要がある。

大洲支部

大洲市立新谷中学校 井上 恵梨香

1 はじめに

大洲支部には、小学校が12校、中学校が8校あります。大洲市教育委員会には、10名のALTが所属しており、各校の英語教師と共に、児童生徒の英語力の向上に向けて日々実践に取り組んでいます。夏季休業中には、「大洲市中学生等海外派遣事業」や「英語デイキャンプ in おおず事業」など、生きた英語に触れる機会を持つとともに、小中の連携を取りながら言語活動の充実を図ることにより、実践的なコミュニケーション能力の育成に努めています。

2 活動内容

(1) 研究目標

コミュニケーションを図る資質・能力の育成
一五つの領域における総合的及び統合的な言語活動を通して一

(2) 活動計画

月	行 事	内 容
4	大洲市教育研究所英語班会	・委員長、副委員長の決定 ・研究目標、行事計画の決定
7	第47回愛媛県中学校夏季英語研修会	・講師 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 教授 中山 晃 先生 ※自主参加
8	大洲市中学生等海外派遣事業 英語デイキャンプ in おおず事業	・詳細は(3)に記載
2	研究のまとめ	・今年度の活動の反省

(3) 夏季休業中の英語関連事業について

大洲市では、夏季休業中に、市内の中学生を対象にした二つの英語関連事業を実施しています。「大洲市中学生等海外派遣事業」では、14名の生徒がオーストラリアのシドニーを訪れました。12日間の活動の中で、現地の小学校で英語のレッスンを受けたり、ホームステイ先のホストファミリーと観光したりしながら、海外の歴史や文化に触れ、貴重な体験をすることができました。「英語デイキャンプ in おおず事業」では、中学2・3年生を対象に2日間のデイキャンプを行い、50名の生徒が参加しました。JTEとALTが協力して活動を計画し、当日は、説明から活動までALTが全て英語で行い、All Englishの2日間となりました。今年度は、帝京第五高等学校に在籍するナイジェリア出身の留学生を招き、バスケットボールを通して英語で交流しました。また、海外の8名のゲストとのオンラインレッスンを行い、英語によるコミュニケーション能力の向上に努めました。

3 おわりに

今年度は、中学校の教科書が改訂され、指導方法や評価について、学校間で情報を共有しながら進めてきました。デジタル教科書やICT機器を効果的に活用し、日々の授業改善に取り組むことができました。今後も、小中の連携を取りながら、より実践的なコミュニケーション能力の育成を目指し、授業改善や教育活動の推進に努めていきたいと思っております。

喜多支部

内子町立内子中学校 阿部 純奈

1 はじめに

海外からの観光客が増え、内子の町並みや各種イベントでは、様々な言語が飛び交っています。内子町には、中学校4校、小学校7校あり、CIR1名、ALT5名が在籍しています。英語検定について、町から受検料の全面的な補助を受けて合格者の増加が見られました。また、毎年9月に英語弁論大会が行われたり、10月に青少年海外派遣（ドイツ）が行われたりするなど、英語学習における環境が整えられています。

2 活動内容

(1) 研究目標

コミュニケーションを図る資質・能力の育成
ー五つの領域における総合的及び統合的な言語活動を通してー

(2) 活動計画

月	行事	内容
4	町教育研究所総会 外国語委員会	・委員長、副委員長の決定 ・研究目標、行事計画の立案
7	第10回愛媛県外国語教育研修会 第15回愛媛県小学校外国語教育研修会 第47回愛媛県中学校夏季英語研修会	外国語教育について考える1日 取組発表：愛媛大学附属中学校 福岡 拓矢 教諭 講師：愛媛大学教育・学生支援機構 教育企画室 教授 中山 晃 先生
9	外国語（活動）委員会研修会（内子中学校授業公開）	指導者：関西外国語大学英語キャリア学部 教授 直山 木綿子 先生
11	小・中外国語委員会授業研究会	1月の研究会に向けて、開催
1	小・中外国語委員会授業研究会	*11月の研究会を踏まえ、開催予定
2	研究のまとめ	活動の反省

(3) 外国語（活動）委員会研修会

9月2日に、内子中学校において、関西外国語大学英語キャリア学部の直山木綿子先生に授業をしていただきました。授業参観の視点は、生徒との関わり方や、気持ちを英語で表現する授業の在り方でした。初対面でも生徒たちの心を惹きつけ、様々な英語表現を使って、生徒たちとのやり取りを見せていただきました。生徒たちの考えや気持ちに関わる質問を適宜行い、生徒たちが興味関心を高め、人と関わる楽しさをどのように教師が支援するのか、勉強させていただきました。

3 おわりに

目的、場面、状況を明確にし、相手意識を考えた言語活動を中心とした単元構成を工夫しながら、各学校で授業改善を行い、情報を共有しながら努めていきたいです。内子町の子供たちが臆することなく、観光客に道案内をしたり、内子町や日本の文化を説明したりできる力を育てていきたいと思えます。

八幡浜支部

八幡浜市立保内中学校 上甲 照子

1 はじめに

八幡浜支部には、中学校2校と小学校12校があります。ALTは八幡浜中学校に3名、保内中学校に1名が配属され、小学校にも巡回して指導を行っています。また、八幡浜市教育委員会にはALTコーディネーターが配置されており、ALT訪問の調整や小学校との連絡・調整を担うとともに、ALTとともに各小学校を訪問し、HRTやJTEと協力してTTによる教育活動を行っています。また、本市では小・中合同で外国語部会を設置し、小中連携や系統的な指導の充実を目指しています。その一環として、年1回の授業研究など、実践を重視した取組を進めています。

2 活動内容

(1) 研究主題

コミュニケーションを図る資質・能力の育成
一五つの領域における総合的及び統合的な言語活動を通して一

(2) 研究内容

- コミュニケーション能力の育成のための評価の研究
- ICTを活用した授業の研究

(3) 活動計画

月	行 事	内 容
4	第1回八幡浜市教育研究集会	・委員長、副委員長の決定 ・研究目標、活動計画の決定 ・研究授業者の決定 ・情報交換
7	第10回愛媛県外国語教育研修会 (第15回愛媛県小学校外国語教育研修会・第47回愛媛県中学校夏季英語研修会)	・講師 愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 教授 中山 晃 先生 演題 「外国語教育を考える1日」 ※自主参加
10	課題別グループ研究	・研究授業 授業者 八幡浜市立双岩小学校 教諭 大谷 美保 ・情報交換
2	研究のまとめ	・活動のまとめ、反省

3 おわりに

今年度は、研究課題が類似した小・中学校同士で2つのグループを編成した上で研究を組み、2つのグループ体制で研究授業を進めています。それぞれの学校が特色を生かした教育活動に取り組みながら、課題解決に向けて工夫と連携を重ねていくことをねらいとしています。

また、小学校外国語科の新しい教科書を中学校に、中学校の教科書を小学校に配付し、教材研究や到達目標の理解を深める研修にも活用しています。今後は、小学校から高校までを見通した外国語教育のつながりについて研究を進め、日々の授業に生かしていきたいと考えています。

西宇和支部

伊方町立伊方中学校 浅野 とくな

1 はじめに

西宇和支部には、3校の中学校と5校の小学校があります。伊方町教育委員会には現在4名のALTが配属されており、1名が2校ずつ担当しています。外国語委員会は小中合同で活動しており、例年、研修会等を通して、それぞれの取組や実践を学び、小中連携に役立てています。

2 活動内容

(1) 研究目標

コミュニケーションを図る資質・能力の育成
—五つの領域における総合的及び統合的な言語活動を通して—

(2) 活動計画

月	行 事	内 容
4	伊方町教育推進集会	・委員長、副委員長の選出 ・研究目標の決定 ・研究推進計画の作成
6	第1回外国語委員会及び研修会 (三崎中学校)	・研究授業、情報交換 授業者 教諭 住 清香 ALT Anna Ostvich
7	第10回愛媛県外国語教育研修会	・委員長、副委員長等の出席 ※部員は自主参加
11	全国英語教育研究大会	※自主参加
1	ショートスピーチトライ (中学校2年生)	・各中学校代表者3～4名によるスピーチ 発表会 ※町内一斉オンライン授業
2	研究のまとめ	・外国語委員会行事報告書の提出

3 おわりに

今年度は中学校で研究授業を行い、小中で授業研究と情報交換を行いました。研究授業では、今年度、中学校の教科書が新しくなったため、デジタル教科書を効果的に使い、ねらいに迫る授業展開がなされていました。また、授業内容や指導方法から小中連携について見直す良い機会となりました。伊方町では、1月に中学校2年生全員参加の「ショートスピーチトライ」というオンラインの一斉授業を町主催で行っています。他校の生徒のスピーチを聞き、内容を理解したり、良い刺激を受けたりすることができる貴重な場となっています。今後も、小中を通じたコミュニケーションを図る資質・能力の育成を目指して、より良い指導の在り方を考え、実践していきたいと思えます。

西予支部

西予市立宇和中学校 川崎 あゆみ

1 はじめに

西予市では、自然が織りなす四季折々の景色や温かな人と人とのつながりが、生徒の豊かな心を育ててくれます。市内には、明浜中学校、宇和中学校、城川中学校、野村中学校、三瓶中学校の5校の中学校があります。小・中学校が合同で委員会を行い、より良い指導法や授業アイデアを共有したり、市の補助を受けながら小・中学生が英検に挑戦したりするなど、小中の連携や系統的な指導の充実を目指しています。

2 活動内容

(1) 研究目標

コミュニケーションを図る資質・能力の育成

—五つの領域における総合的及び統合的な言語活動を通して—

(2) 活動計画

月	行事	内容
4	西予市所属部会総会	・ 委員長、副委員長の決定 ・ 研究目標、行事計画の立案
5	第1回市教科等・専門委員長、研究委員合同研修会	・ 研究推進計画、予算配分
6	第1回外国語委員研修会	・ 研究推進計画の確認 ・ 各校情報交換
8	第2回外国語委員研修会	・ 市教育研究大会の指導案審議
10	西予市教育研究大会 夏季外国語委員研修会	・ 研究授業、研究協議 ・ ロイロノート授業活用研修会
1	第3回外国語委員研修会	・ 会務報告、会計報告 ・ 研究活動の反省、来年度に向けての提案
2	第2回市教科等・専門委員長、研究委員合同研修会	・ 会務報告、会計報告 ・ 研究活動の反省、情報交換

3 おわりに

GIGA スクール構想における児童生徒1人1台端末をはじめ、児童生徒が主体的に学習できる環境は整ってきています。児童生徒が「自ら学びたい」という意欲を持てるよう、学ぶことの楽しさや面白さを体験させる授業づくりを目指します。そのために、教材や指導方法を工夫しながら授業改善を重ねていきたいです。

宇和島支部

宇和島市立城北中学校 末光 展也

1 はじめに

宇和島支部は、小中連携の推進を図りながら研究・実践に取り組んでいます。今年度も、小中合同の外国語活動・外国語科研究委員会（夏季研修会）を行いました。昨年度に引き続き、講師をお招きして研修を深めました。

2 活動内容

(1) 研究目標

コミュニケーションを図る資質・能力の育成

一五つの領域における総合的及び統合的な言語活動を通して一

(2) 活動計画

月	行 事	内 容
4	第1回教科等研究委員会	・ 正副会長、常任委員の推薦 ・ 研究目標、行事計画の立案
5	第2回教科等研究委員会	・ 正副会長、常任委員の承認 ・ 研究目標、行事計画の承認
7	外国語活動・外国語科研究委員会	・ 研修テーマ 「外国語の授業づくり研修会」 ～日頃の悩みを解決する五つの講座～ ・ 講師 北海道士幌町立士幌町中央中学校 教諭 加藤 心 先生
2	研究のまとめ	・ 今年度の研究のまとめと活動内容の反省 ・ 報告書の提出

3 おわりに

7月の外国語活動・外国語科研究委員会では、「単語の指導法」「書く力を向上させる手立て」「小中のギャップを解決するには」「主体的な学びのための工夫」「教えて加藤流テクニック」の五つのテーマを中心に研修を深めました。教育委員会や宇和島市以外の地域からも多く参加していただき、大変充実した研修会となりました。研修会では、日頃の指導の悩みについて意見交換し、実際に加藤先生の授業を児童生徒の立場で体験しながら、自分の授業を見つめ直すことができました。また、加藤先生も日々の授業でロイノートを活用されており、様々なアイデアを紹介していただきました。今後の授業改善及び実践につながる有意義な研修会となりました。

これからも、教師一人一人が指導力の向上を目指すとともに、児童生徒の英語力向上のために研修を推進していきたいと思えます。

北宇和支部

鬼北町立広見中学校 清家 怜

1 はじめに

北宇和支部には、松野町に中学校が1校、小学校が2校、鬼北町に中学校が2校、小学校が6校ある。松野町には2名、鬼北町には3名のALTが在籍している。鬼北町立日吉中学校では、隣接する日吉小学校と連携して英語教育を行っており、中学校の英語科教員が小学校の外国語と外国語活動の授業を行っている。

2 活動内容

(1) 研究目標

コミュニケーションを図る資質・能力の育成
一五つの領域における総合的及び統合的な言語活動を通して一

(2) 活動計画

月	行事	内容
5	第1回外国語活動・外国語科主任研修会	・研修主題の決定 ・研究推進計画の立案
11	第2回外国語活動・外国語科主任研修会	・各校の取組についての情報交換
1	第3回外国語活動・外国語科主任研修会	・情報交換 ・1年間の反省

3 おわりに

昨年度に引き続き、8月に10日間のオーストラリア海外語学研修（鬼北町は鬼北町人材育成ふるさと基金海外研修事業、松野町は松野町人材育成基金語学研修事業）を実施することができた。鬼北町と松野町合同で行い、9名の生徒が参加した。生徒たちは、現地でホームステイをしたり、学校に通ったりして、日常では経験しがたい多くのことを学んで帰国した。

7月30日に、エスポワール愛媛文教会館で行われた「愛教研第10回愛媛県外国語教育研修会」「第47回愛媛県中学校夏季英語研修会」「第15回愛媛県小学校外国語活動・外国語研修会」に北宇和郡からも参加した。また、北宇和支部では、各学校の取組（授業、ALTとのTT、各校の特色ある取組等）について情報交換をしたり、クラスの人数が少ない小学校間でオンラインを通じた授業交流をしたりすることができた。今後も小中連携を含む各校の情報交換や授業交流を行い、充実した教育活動を展開できるように努めていきたいと考える。

南宇和支部

愛南町立城辺中学校 岩崎 浩美

1 はじめに

南宇和支部は、小学校6名、中学校8名の計14名の会員で外国語委員会を編成しています。主な活動として、例年、外国語委員会で小中合同の研究会をしており、この活動を通して、それぞれの取組を知り、実践を学び、小中連携に役立てています。

2 活動内容

(1) 研究主題

コミュニケーションを図る資質・能力の育成

一五つの領域における総合的及び統合的な言語活動を通して一

(2) 活動計画

月	行 事	内 容
5	教科等委員会	・ 委員長、副委員長の決定 ・ 研究目標、活動内容の決定
7	県外国語教育研修会	・ 委員長、副委員長等の参加
11	外国語委員会研究会	・ 研究授業 授業者 愛南町立御荘中学校 教諭 水田 和浩 ・ 研究協議 ・ 情報交換
2	研究のまとめ	・ 今年度の活動の反省

3 おわりに

今年度の外国語委員会研究会は、中学校での授業研究会を開催しました。ICTを活用した授業の実践により、生徒が意欲的に学ぶ姿が見られました。ICTを活用することは、学習者のモチベーションの向上や主体的な学習態度を育むことにつながるため、これからの授業の参考となりました。また、授業者がクラスルームイングリッシュを多く活用することで生徒たちへのモデルとなり、生徒たちが英語に浸ることができる雰囲気もありました。参加した教員も大変刺激を受けた研究会になりました。

また、この研究会では小学校と中学校のグループに分かれて情報交換を行いました。小学校のグループでは、外国語の授業を行うにあたって悩んでいることについて話し合い、教授法についての講義もありました。今後も小中連携を大切に、教師一人一人が指導力の向上を目指すとともに、生徒の英語力向上のために研修を積んでいきたいと思えます。

附属支部

愛媛大学教育学部附属中学校 福岡 拓矢

1 研究の概要

本校では、3か年研究の研究主題を「学校ウェルビーイングを実現する教師と生徒の協働改革－教師の働きやすさと生徒の充実した学校生活の両立を目指して－」とし、研究に取り組んでいます。本年度は、1年次として「エージェンシーを基盤とした協働的アプローチの実践・検証」というテーマで実践と検証を進めています。外国語科では、「生徒が他者や社会との関係性の中で、自由に英語で表現できる授業展開の工夫」を研究テーマとしました。英語を通して他者とよりよい関係を築いていこうとする力を身に付けさせたり、教師は授業の中でそれをうまく発揮させる場面を設定したりしていきます。そうすることによって、生徒が他者と交流し、自身の視野を広げ、物事を多面的・多角的に捉えることができる力を伸ばしていけるようにします。また、生成AI(ChatGPTなど)を活用することで、生徒の表現の幅を広げ、他者とのコミュニケーションの中で、自分の伝えたいことを自由に表現する力を身に付けさせていきます。

2 研究内容

近年の英語教育においては、単なる文法や語彙の習得に留まらず、自己の考えや感情を的確に英語で表現する表現力の育成が重視されています。しかし、中学生の英語表現を振り返り、定型的で単純な構文に留まっていたり、語彙が限られていたりするなど、多様で豊かなアウトプットに課題があると感じる場面が多く見られます。特に英作文やスピーキングにおいては、自分の言いたいことを表現するための手段が不足していることから、表現が「短い」「似通っている」「消極的になる」といった傾向が見られます。これは、生徒自身の語彙力・文法力の課題に加えて、英語を使って試行錯誤する場や良いモデルに触れる機会の不足も一因と考えられます。

こうした課題を解決する手立てとして、近年注目されている生成AI(ChatGPTなど)を活用することで、生徒にとって多様な英語表現のモデルを提供し、試行錯誤を支援することができるのではないかと考えています。AIとのやりとりを通じて、生徒が自らの表現力を高めたり、適切な言い換えや表現選択に気付いたりする環境を整え、英語表現力を伸ばすことを期待しています。

本研究の目的は、中学生の英語表現力を高めるために、生成AIを活用した指導実践を開発・実践・検証することです。具体的には、生徒がAIと英語でやり取りを行いながら、より多様で豊かな英語表現に触れたり、言い換えや文構造の工夫を体験したりすることで、自己表現の幅を広げることを目指します。また、生徒がAIから得た英語表現をもとに、自らのアウトプットを改善するプロセスを通じて、英語を使った試行錯誤の機会を創出し、英語表現への自信や自己効力感の向上を図る実践に取り組んでいきます。さらに、AI活用による指導法の有効性を検証し、英語科における新たな教材・授業設計のモデルを提示することを目指します。

V 英語委員会各部の活動

○ 評価研究部

愛媛大学教育学部附属中学校 教諭 向井 俊博

評価研究部では、多くの先生方に執筆・監修のご協力を得て、テスト問題の作成を以下の日程で進めてまいりました。今年度の診断テストは教育出版、東京書籍、光村図書の3社で行いました。

<学力診断テスト>

学力診断テスト作成委員会 テスト作成打ち合わせ会 6月14日（文教会館）

- | | | | | |
|-----------------------|----------------------------------|-----------|------------|--|
| 第1回 | 学力診断テスト作成委員会 | 4月実施分原稿審議 | | |
| | ・ONE WORLD | 7月28日 | 今治市立日吉中学校 | |
| | ・NEW HORIZON | 8月1日 | 松前町立北伊予中学校 | |
| 第2回 | 学力診断テスト作成委員会 | 9月実施分原稿審議 | | |
| | ・Here We Go! | 10月4日 | 今治市立日吉中学校 | |
| | ・NEW HORIZON | 9月13日 | 松前町立北伊予中学校 | |
| 第3回 | 学力診断テスト作成委員会 | 1月実施分原稿審議 | | |
| | ・Here We Go! | 11月15日 | 今治市立日吉中学校 | |
| | ・NEW HORIZON | 9月13日 | 松前町立北伊予中学校 | |
| 学力診断テスト 聞き取り問題録音(予定日) | | | | |
| | ・ONE WORLD(3年),Here We Go!(1・2年) | 1月24日 | 今治市立日吉中学校 | |
| | ・NEW HORIZON | 2月中旬 | 松山市立余土中学校 | |

<実力テスト>

- | | | | |
|-----|------------|--------------|-----------------|
| 第1回 | 実力テスト作成委員会 | テスト作成打ち合わせ会 | 6月14日（文教会館） |
| 第2回 | 実力テスト作成委員会 | 原稿審議① | 10月11日（文教会館） |
| 第3回 | 実力テスト作成委員会 | 原稿審議② | 12月7日（文教会館） |
| 第4回 | 実力テスト作成委員会 | 聞き取り問題録音（予定） | 2月中旬（松山市立余土中学校） |

○ 行事部

松山市立勝山中学校 高田 真奈実

令和7年5月28日(水)愛媛大学教育学部附属小学校で開催された愛媛県教育研究推進委員会において、外国語委員会英語部会が開催されました。行事部では、第10回愛媛県外国語教育研修会の実施、年間を通しての活動計画等について話し合いが行われました。

1 第10回愛媛県外国語教育研修会

(1) 日時 令和7年7月30日(水) 10:00~15:20

(2) 会場 エスポワール愛媛文教会館

(3) 内容 ①10:30~12:00

講演「外国語教育について考える1日」(小学校教員対象)

講師 愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 教授 中山 晃 先生

②13:00~13:30 取組発表

「AIで行う評価の研究について」

発表者 愛媛大学附属中学校 教諭 福岡 拓矢

③13:40~15:10

講演「外国語教育について考える1日」(中学校教員対象)

講師 愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 教授 中山 晃 先生

2 高円宮杯第77回全日本中学校英語弁論大会愛媛県大会

(1) 日時 令和7年9月20日(土)

(2) 会場 エスポワール愛媛文教会館

(3) 内容 愛媛県内28校から28名の中学生の参加がありました。

VI 憩いの広場

小さな好奇心が大きなきっかけに

四国中央市立川之江北中学校 松田 志緒理

夢だった教師という職に就いて数か月経ったが、仕事の大変さや教えることの難しさを感じる一方で、子供たちと触れ合い、成長を見守ることに多くのやりがいも感じながら精一杯職務に励んでいる。英語教師になりたいと思い始めたのは中学1年生の頃で、当時の英語の先生がきっかけだった。授業を通して読み書きやコミュニケーションができるようになるのを実感し、英語学習の楽しさを知った。先生が留学した時の話を授業中によくするので、いつか自分も海外に行ってみたいと漠然と思っていた。この時は小さな好奇心だったが、まさか数年後、本当に海外に行くことになるとは当時の私は思わなかった。

高校に進学してからも英語の授業はとても楽しかった。他の教科のテストの点数が悪くても、英語だけは勉強を頑張った。修学旅行でハワイを訪れ、初めての海外にワクワクが止まらなかった。見るもの全てが新鮮で、異文化に触れることに対する興味関心や、英語を話すことに対する自信が高まった。それまで英語を学ぶ楽しさは授業の中だけに留まっていたが、実際に海外を訪れたことで自分の世界が一気に広がった。あの時感じたワクワクを、子供たちに伝えたいとこの頃から強く思うようになった。その後、教師になるという夢を抱いて大学へ進学し、さらに英語学習に励んだ。お世話になった教授がイギリス出身だったため、イギリスの文化に興味を持ち、2年間懸命に貯めたアルバイト代をはたいて、大学3年生の夏に念願だったイギリスへ1か月間の短期留学に行った。1人で行く海外は初めてだったが、ホストファミリーや友人に恵まれ、毎日が充実していた。語学学校に通い、たくさんの国から私と同じように英語を学びに来ている仲間に出会い、良い刺激を受けた。週に3～4日は友人らとロンドンに行き、買い物をしたり食事をしたり観光地を巡ったりした。今まで画面越しでしか知らなかった景色をこの目で実際に見ることができ、非常に感動した。一番印象深い思い出は、友人とミュージカルを観に行ったことである。初めて“Mamma Mia!”のミュージカルを劇場で観た時、ホールに響く音楽や歌声に圧倒された。何より観ている観客のリアクションが自由で、彼らの笑い声や拍手がミュージカルを盛り上げる要素の一つとなっていた。演者と観客が一体となって作るその瞬間にしかない空気を味わうことができ、ミュージカル鑑賞の魅力はもちろん、自ら足を運び実際に経験し感じるということがいかに大切であるかを再認識した。なんとなく学校で学んでいた英語が、私にとっては人生を左右する大きなきっかけとなった。すてきな先生方に恵まれ「教師になる」という夢ができ、今私は教壇に立つことができている。英語を学んできたお陰で、間違いなく私の人生は彩り豊かなものになったと思う。「なぜ学校で英語を学ぶのか」という問いに対する答えが、これらの経験に全て詰まっているような気がする。

英語を学ぶ立場から教える立場になり、本格的に英語を学び始める中学生を相手に「子供たちがどうすれば英語を好きになるか」を常に考えながら授業づくりに取り組んでいる。得意・不得意関係なく、英語や異文化に触れることを「楽しい」と思える心を育みたいというのが私の考えである。英語を学ぶ楽しさを教えてくださった先生方には感謝してもしきれない。自分の経験を基に、今度は私が英語を学ぶ楽しさを伝えることができるよう、自分自身も学びの姿勢を持ち続け、教師の職責を精一杯全うしたい。

人とつながれる英語

四国中央市立土居中学校 亀田 裕真

私と英語のはじめての出会い、小学生の頃にまで遡る。当時、英会話教室に通っており、そこで様々なゲームをしたり、実際に英会話教室の友人と英語を使ってコミュニケーションを取ったりしていた。しかし、小学生の頃の私はあまり英語には興味がなく、覚えるだけでできるようになるものだと考えていた。英語を使う意味も特に理解できず、退屈に感じていた。それでも、休まず通っていたこともあり、中学生になると、英語は私の得意教科の一つになっていた。

そんな自分が英語教師を目指すきっかけになったのが、中学校の英語の授業である。私が最初に英語に興味を持ったのは、当時の英語の先生の熱心な指導と、授業の中で感じた「人とつながる力」の魅力が大きな影響を与えたからである。その先生は、英語の授業をただの英語を学ぶ時間ではなく、実際に英語を使ってコミュニケーションを取る楽しさを教えてくれた。英語を通して、クラスメートと関わる機会をたくさん作ってくれたおかげで、新しい交友関係を築くことができた。それまでは、英語は暗記の教科だと考えていたが、英語は人と人とをつなぐ架け橋にもなるのだと考えるようになり、英語に興味を持つようになった。授業の中で、最初は間違えることが怖かったが、先生が「間違ってもいい、伝えることが大事！」と励ましてくれたおかげで、だんだん自信を持つことができ、英語の授業が楽しいと感じるようになった。

大学時代に行った2週間のホテルへのインターンでは、英語を通じて更に多くの人と関わり、世界とのつながりが広がった。ホテルの従業員として、海外からの旅行客に積極的に関わり、SNSでは知ることができないその国独自の文化について知ることができた。その後も交流を深め、ホームパーティーにも招待され、海外の人々とたわいもないことや、お互いの国や職業のことなどについて英語を用いて話し合い、楽しい時間を共有することができた。この経験からも、英語は人とつながるためのツールなのだ改めて感じた。

今、私は教師として、生徒に英語の楽しさや、その先に広がる可能性を伝える立場に立っている。英語を学ぶことはもちろん大切なことであり、授業を通して、生徒に少しでも英語でコミュニケーションを取るためのスキルを身に付けさせたいと考える。しかし、それだけではなく、英語を通じて人とコミュニケーションを取り、つながることの楽しさにも気付かせたいと考える。そのためにも、まずは何よりも自分が堂々とした姿で英語を使用し、授業中は間違いを許し合える雰囲気を作り、英語が苦手な生徒にも楽しいと思ってもらえるような授業を展開していきたい。最初は英語が好きではなかった私が、英語を通じて多くのことを学び、成長することができた経験を生徒に伝えたいと考える。英語はただの言葉の学習ではなく、自分を表現し、相手を知り、人とつながるきっかけになるということを、教室で一緒に感じるような英語教師を目指したい。私にそれを教えてくれた先生のように。

これまでと、これからと

新居浜市立南中学校 立野 ころろ

私が英語に興味を持つようになったきっかけは、幼少期の家庭環境にある。いとこがマレーシア人と日本人のハーフであり、その姿を通して異文化や英語という言葉に触れる機会を得た。身近な存在であるいとこが、日本語以外の言葉を自然に用いる姿が幼い私にとって新鮮であり、次第に「英語をもっと理解したい」という気持ちが芽生えるようになった。この経験が、私の英語学習の出発点であり、その後の進路や職業選択に大きな影響を与えることとなった。

その後、中学校に進学すると、英語の授業を通して言語の奥深さや学ぶことの楽しさをより強く実感した。実は、私は小学校3年生の頃から英語教室に通い、基礎的な英語学習に取り組んでいたため、英語を学ぶこと自体には親しみがあつた。中学校の授業では単語や文法の積み重ねが一つの意味をなし、自分の言葉として相手に伝わるという感覚を得ることができ、英語の持つ力に一層魅了された。さらに、熱心に指導して下さった英語科教師の姿に大きな影響を受け、その姿に憧れを抱いたことが、将来教員を目指す直接のきっかけとなった。

高校時代には、その理想像を更に具体的に思い描くようになった。当時の私は、「誰一人見捨てず、生徒に寄り添い続けることのできる教師」こそが目指すべき姿であると考えていた。しかし、私が教師を志望することを周囲に伝えた際、友人や家族からは「本当に大変な仕事だよ」「理想だけではやっていけないよ」といった心配の声を多く掛けられた。確かに、教師という職業が持つ責任の重さや困難さを、当時の私自身も十分に理解していたわけではなかった。それでもなお、理想とする教師像を実現したいという強い思いは揺らぐことなく、むしろそうした声を受けて、自分の覚悟をより確かなものにしていった。

大学の4年間では、英語教育について専門的に学びながら、自らの経験を重ねることで現状への理解を深めていった。特に印象的だったのは、塾でのアルバイトを通して見えた子どもたちの姿である。小学校で英語に触れていた児童が、中学校に進学すると急に学習内容が難しくなり、そのギャップに対応できず自信を無くしてしまうケースを多く目にした。小学校では英語に「親しむ」ことが中心であったのに対し、中学校では文法や文章読解といった体系的な学習が求められる。この急激な切り替わりに戸惑う生徒が少なくなく、英語が嫌いになってしまう子もいた。そうした現状を目の当たりにし、学びの連続性や子どもたちの心理的な壁を意識した授業づくりの必要性を強く感じるようになった。大学での学びは、単なる知識の習得にとどまらず、現実の子どもたちの姿と結びついて初めて実感を伴うものとなった。

そして、教師になってからの5か月間は、まさに学びと挑戦の連続だった。授業準備や生徒の対応はもちろんのこと、部活動の指導との両立にも大きな難しさを抱えている。生徒の成長を支えたいという思いは強い一方で、限られた時間の中で授業と部活動の両方に全力を注ぐことは容易ではない。それでも、練習や試合を通して生徒と過ごす時間は、教室の授業とはまた違った関わりを可能にし、信頼関係を深める大切な機会となっている。振り返れば、まだまだ未熟さを痛感する場面の方が多いが、日々の試行錯誤の中で少しずつ前進している手応えを感じている。

これから先の教員生活では、これまで抱えてきた夢や理想をより洗練させ、それを実現できるように想像力を磨き続けたい。そして、生徒一人一人に寄り添いながら、確かな学びを保障できるよう教科指導の技術を高めていきたいと考えている。同時に、ここまで努力を重ねてきた自分にガッカリされないよう、日々を全力で歩いていくことが、今の私にできる最大の責任だと思っている。理想と現実の間に壁を感じることもあるだろう。しかし、その壁を乗り越え続ける姿を生徒に示すことこそが、教師としての生き方であり、私自身が目指す未来の姿である。これまでが導いてくれた道を、これからの私が静かに、そして確かに歩いていきたい。

The connection by touching English

新居浜市立泉川中学校 曾我部 愛実

私が、本当の意味で「英語」に触れ、楽しさに気が付いたのは、中学生の時だった。中学1年生。当時、英語の基礎であるアルファベットの学習を始めた時には、英語に対し全くと言っていいほど関心がなかった。日本語ではない他の言語を習得することに対して難しさを感じていた。

しかし、私の運命を変えたのは、中学2年生の時だった。いつも難しさや大変さを感じていた英語の授業が本格的に楽しいと感じるようになった契機は、ある英語の先生との出会いだった。私はその英語の先生の授業のスタイルがとても好きだった。特に好きだった取組は「たけのこ Reading」だった。自分の中で自信を持っていたのが、言葉で表現したり、伝えたりすることだった。その先生が行う「たけのこ Reading」には、好きな言葉で表現するという、私にとっての大きな利点が含まれていた。更に教室の中で協力し、物語の中の一文一文を読み合っていくこの活動は、単に声に出し抑揚をつけ、表現する音読の作業だけでなく、クラス全員で一つずつ文章を読んでいき、物語を完成させるというどこか達成感を感じる要素があった。そして、その英語の先生の取組は、Readingの工夫だけでは留まらなかった。私が中学3年生になった時、高校受験に向けて「Writing ノート」という取組が始まった。その内容は、1週間で英語の文章を100文以上書いてくるという課題だった。私はその作業もとても好きだった。なぜなら、英文の内容は、自らの経験に基づいたオリジナルの文章を書いていいという条件だったからだ。自分自身の自由な発想とこれまでの経験を活かしながら「想い」を伝えることができる英語の魅力はこのような授業での活動だけでなく、私自身が人間として成長できるきっかけを与えてくれた。

中学3年生の7月、私はある決断をした。「新居浜市英語スピーチコンテスト」への出場だ。英語で表現をすること、伝えることの楽しさに魅了された私は、このスピーチへの参加を思い切って決断した。内容は自分自身の夢についてだった。夢を追い続けることの楽しさや夢を叶えるための鍵になることはどのようなことなのか、多くの聴衆がいる中で堂々と伝えることができた。

これらの中学時代の経験を通して、今の私がいる。私が思う英語の魅力は、熱を持って、自分自身の中にある想いを相手に伝えることだ。どのような内容を伝えるか、それ自体は人それぞれでいいと考える。しかし、その内容を相手に伝えようとする姿勢を持ち、努力することで、その言葉を聞いている相手の心を揺さぶることができる。感動を与えることができると、自然と相手の方から反応が返ってきたり、リアクションをしたいという純粋な思いが生まれたりすると考える。通じ合った気持ちそのものが、やがて人が発する言葉となる。最終的に、想いを含んだ言葉が連鎖し合い、真のコミュニケーションに発展していくと考える。

現在、英語は世界の共通言語として世界中の人々がお互いを知るための必要不可欠なツールとしての役割を担っている。「なぜ英語を学ぶのか」。今年の4月に最初の英語の授業で、生徒に投げかけたこの問いに対する答えは、まだまだ探している途中である。しかし、これだけは言える。英語を学ぶことで人と人が“つながる”ことができる。自分自身が出会ったことのない人と英語を通じて言葉を交わすことで、相手の考えを知り、新たな価値に触れることができる。そして、その価値に触れ、様々な考えを自分の中に映し出し、内面化していくことで視野が広がり、人間としての成長につながっていくのではないかと考える。私は、英語教育がそのような連鎖を生み出し、子供たちの前進になるような役割を担うと信じている。その信念のもとに、今日も英語の授業を精一杯頑張る。

いつか恩師と呼ばれる存在に

西条市立西条北中学校 山室 日向子

私は、小学校低学年から英語学習を始めた。英語で歌ったり物語を読んだり、ずっと一人で、音声を聞いて、まねて、を繰り返していた。外国語を上手に発音できるようになるのが嬉しくて、どんどん難しい文法や単語を覚えていった。また、理解できた時の達成感が大好きで、「英語が分かる私がかっこいい」と、英語学習に励んでいた。

そんな私が中学校に入学するとき、英語の学習内容はもう知っていることばかりだからつまらないだろうと想像していた。しかし、想像とは異なり、中学校時代の恩師は、対話活動を多く取り入れ、分からないながらも頑張ってくれて英語で会話をする楽しさを教えてくれた。さらに、英語弁論大会や英語キャンプなど成長する機会も与えてくれた。英語で意見を発信して聞いてもらったり、海外の人とコミュニケーションを取ったりする経験を多くさせてもらった。その中で、今まで一人で英語と向き合ってきた私は気付いた。案外、人と実際に話すときは英語がすぐ思いつかない。今まで聞いてきたきれいな英語ばかりではない。「全然英語が分からない私がかっこよくない」と。同時に、英語は人と話すためのツールだとも気付いた。“分からない”がおもしろい。これまで学んできた知識をもっと使って、もっとたくさんの人とコミュニケーションを取りたい。中学校での出会いを通して、私は一人だけの世界から、たくさんの人たちのいる英語の世界の扉を開くことができた。

そんな中学校時代の様々な経験を経て、私は何事に対しても挑戦したいと物怖じせずいろいろな場所に飛び込み、前向きで積極的に行動できる自分になることができた。勉強やコンテスト、部活に向かう忍耐力や集中力、誰に対してもコミュニケーションを取ろうとする積極性、勇気を持って飛び込んでいける行動力など、これらは全て中学校で培われたものだとは強く感じる。中学時代の経験がなければ、失敗を恐れて動けないままだったかもしれない。私は、自分の可能性を広げてくれた中学校や中学校で出会った恩師に本当に感謝している。そして私は次第に教師という職業に魅力を感じるようになった。

今年、憧れの教師となり、いざ教壇に立ってみると、中学校の時の恩師の先生方の顔が思い浮かび、あの時の工夫や立ち回りは本当にすごかったと更に尊敬の念を抱くようになった。今の私は他の先生方に助けてもらうことや要領よく動けないことがほとんどで、もどかしく思う日々が続いている。しかし、自分のできないという悔しさやもどかしさは、生徒の頑張る姿を目にし、成長を感じた瞬間に一気に払拭されるのだ。もちろん自分の指導力不足には反省の毎日だ。しかし、それでもそんな少しの喜びで、もっと生徒のために何かしたい、もっと成長してできることを増やしたい、このように自然とやる気が出てくるのだ。

私を変えるきっかけを与えてくれたのは、恩師と学校だ。学力だけではなく、精神的にも大きく成長を促し、たくさんの経験と知識を与えてくれた。今はまだ生徒たちにとって不十分な指導しかできていない。しかし、今の私にできることは、少しでも生徒の成長につながるように、私ができる最大限を発揮し続けることだ。そして、いつか私も恩師と呼ばれる存在になりたい。

悩んで手にいれたもの

西条市立河北中学校 黒田 未祈

私が教師を志したのは中学1年の冬だった。当時の英語の先生に憧れたから教師になろうと思った。あれから9年の年月が経ち、あのときの自分は今の私をどう思うのだろうか。この期間、振り返れば様々なことがあった。日本を飛び出したり、教師になろうか悩んだりしたこともあった。

自らの英語力を伸ばしたいという思いから、イギリスに3週間の短期留学に行った。目新しい景色に心躍ったのは今でも鮮明に覚えている。もちろん、言語の壁にもぶつかったが、それ以上にこの留学で悩んだのは自分自身の性格だった。引っ込み思案の私は、授業に対して積極的ではなかった。答えが分かっているにもかかわらず手を挙げなかった。しかし、イギリスではそれは通用しなかった。サマースクールの授業中に同じことをしたら、ケニア人の友人にとっても不思議そうな顔をされた。あの瞬間は今でも鮮明に覚えていて、なぜか忘れられない。これでいいのかと考え直し、正直に自分の気持ちをぶつけるようになった。分からないことはすぐに聞くようにした。迷惑に思われるかと思ったが、意外にすぐに助けてくれるので驚いたものである。あの留学で自分の中で何かが変わったような気がする。

就職活動期に入り、本格的に自分の将来と向き合うこととなった。私は、教師になろうか悩んでいた。自分は教師に向いていないのではないかとずっと思っていた。教師の自分と会社員の自分、想像できたのは後者だ。周りと同じように就職活動もしていたので、会社員になることもできた。最終的に教師を選んだが、自分には向いてはいないと思う。何かをして他の先生方に迷惑を掛けたり、授業が上手くいかなかったりすると、落ち込むことがある。特に授業に関しては、生徒に申し訳ないと思う。「私じゃなくて、あの先生だったら…」と何度思ったことだろうか。しかし、生徒に「先生の授業、楽しみです。」「先生、今日は楽しかった!」と言われると、その悩みは一気に晴れていく。ネガティブなことは日々少しずつ積み重なっていき、嬉しいことは突然訪れて一気に心を晴らしてくれる。別に教師に向いていなくてもいい。ただ、毎日目の前にいる生徒と向き合い続けていきたい。

大学時代の恩師が教師になる私に最後に贈ってくれた言葉がある。

「先生って呼ばれることが、この仕事の特権。子どもに先生って呼ばれると、落ち込んでもしっかりしなきゃって思えるのだから。」

この言葉にすべての先生が賛同してくれるかは分からない。しかし、私は何となくこの言葉に納得ができる。先生と呼ばれると、落ち込んでなぜか頑張ろうと思える。もし、私が会社員になっていたら、この特権は得られなかった。やはり自分はこの仕事を選んでよかったと思う。

今まで出会った生徒には、英語が好きだという生徒よりも苦手だという生徒の方が多かった。そんな生徒に少しでも英語の楽しさを伝えたいといつも思っている。英語には世界に目を向けるきっかけを与え、視野を広げられるという魅力がある。その魅力を生かして、自分の授業を受けた生徒に「いつか海外に行きたい。」「英語を話せるようになりたい。」と思ってもらいたい。英語が苦手な生徒に寄り添いながら、すべての生徒の可能性を最大限に引き出せる授業を目指して、これからも努力を続けていきたい。

伝わる喜びがくれたもの

西条市立東予東中学校 中矢 千陽

私が英語教師を志すようになったのは、これまでの学びや経験を通して、英語という言語の持つ魅力を生徒にも伝えたいと考えるようになったからである。中学時代で一番得意だった教科は英語であった。文法の仕組みや単語を覚えることはあまり苦にならず、授業中に学習した表現を用いて簡単な会話をゲームを通してできることが楽しかった。テストの結果も他教科に比べて良好であり、その達成感が更に意欲を高めてくれた。当時「自分には英語が向いているのかもしれない」という自信を持ち始め、自然と英語を学ぶことに積極的になっていた。

高校に進学してからも、その思いは続いた。授業で扱う英文の難易度は上がったが、文章を読み解くことで異文化の考え方や価値観に触れることができるようになり、英語を学ぶ楽しさが更に広がった。そして大学生になったとき、自分の英語力をより実践的に試したい、そして実際に外国で生活することで「生きた英語」を身に付けたいと考えるようになった。その思いから、私は大学2回生の時にイギリスへ半年間の留学を決意した。

留学先では、現地の大学に通いながら、ホストファミリーの家でホームステイを経験した。到着前までは大きな不安も抱えていたが期待もあった。しかし、到着後すぐに言葉の壁の高さを痛感することになった。ホストファミリーが日常的に使う英語はスピードが速く、教科書で学んできた表現とは異なる言い回しも多く、会話についていけないことがしばしばあった。自分が伝えたいことを言葉にできず、もどかしさや悔しさを味わったことも一度や二度ではなかった。買い物やバス・電車の乗り方一つを尋ねるにも苦労し、当初は自信をなくしかけた。

しかし、そうした壁にぶつかったからこそ、英語に対する関心は一層深まっていった。ホストファミリーは、つたない英語であっても根気強く耳に傾け、時には正しい言い方を教えてくれた。夕食の時間に文化の違いについて話したり、休日に一緒に出かけたりする中で、英語で伝えようとする努力を評価してくれる姿勢に励まされた。少しずつ会話を通じるようになっていく過程は、大きな自信となり、英語を使って「相手とつながることの楽しさ」を実感できた瞬間だった。半年間の留學生活を終えたとき、私は「もっと英語を学びたい」という強い意欲を抱き、更に英語教育という道を意識するようになった。

この留学経験は、単に英語の力を伸ばすだけでなく、人と人とのつながりや文化の違いを受け入れ、他者を理解しようとするきっかけとなった。言葉は単なる知識ではなく、人と人とを結び付ける大切な道具であり、文化や背景が異なる相手と理解し合うためのものであることを実感した。自分が学び得たこの魅力を、将来は生徒にも伝えていきたいと考えるようになった。英語の面白さや可能性を共有することで、生徒が「英語を通して自分の世界を広げたい」と思えるようにしたい、これが英語教師を目指す一つの原点となった。

そして、英語教師になり、自分が学んできたことをそのまま伝えればよいと考えていたが、実際には思うようにいかないことが多い。自分では簡単だと思う文法事項でも、生徒にとっては難しく感じられることもあり、どのように説明すれば分かりやすいのか悩む日々が続いている。今後は、英語を単に知識として教えるのではなく、コミュニケーションの楽しさを生徒に伝えられる教師を目指していきたい。そのために、授業の工夫や指導力の向上に努め、教育者として成長し続けたい。

授業の壁と小さな喜び

今治市立伯方中学校 杉田 智紀

私が教員になってから、5か月が経った。初めは生徒との関係にぎこちなさがあったが、日を迫うごとに積極的にコミュニケーションが取れるようになった。休憩時間に他愛もない話で盛り上がったり、部活動の指導をしたりする中で、少しずつ生徒が心を開いてくれているのを感じるようになった。事務作業では今でもミスが多く、ご迷惑をお掛けすることが多いが、初めに比べると少しずつ慣れてきた。しかし、授業に関しては、まだ手応えを感じられていない。10年以上教壇に立つベテランの先生でも、本当に成功したと言える授業はごくわずかだと聞いたことがある。そのため、まだ1年も経たない私が簡単に成果を出せるとは考えていないが、この5か月間で、教えることの難しさを身を持って痛感した。

最も力不足を感じるのは、「指導の見通しの甘さ」だ。生徒に意図がうまく伝わらなかったり、習熟度に合わない活動をしてしまったり、授業の目的からずれてしまったりすることが多々ある。例えば、ある文法事項を導入した際、私の説明が抽象的すぎて、生徒の顔に「？」が浮かんでいるのが分かった。慌てて別の例を挙げようとしたが、頭が真っ白になってしまい、結局、その日の授業は不完全燃焼に終わってしまった。教材研究の段階では完璧だと思っていなくても、いざ授業をしてみると、思い通りに進まないことがほとんどだ。

また、授業を進めることに精一杯になり、生徒の様子を深く観察できていないことも課題だ。手が止まっている生徒や、うまく発表できない生徒を補助できず、T2として入ってくださっている先生にフォローしていただくことも多かった。その先生は、私が気付かないような生徒の小さなつまずきにもすぐに気付き、的確なアドバイスをされている。その姿を見るたびに、自分の未熟さを痛感する。授業中に自分自身が混乱し、生徒に情けない姿を見せてしまうこともあった。

授業の難しさに直面し、何度も落ち込み、「自分は教員に向いていないのではないか」と思うこともあった。それでも、この5か月で授業の喜びも経験できた。ある日、授業後に生徒が「先生、今日の授業すごく良かったよ！」と声を掛けてくれたのだ。自分ではうまくいったとは思えなかったが、この何気ない一言が心に深く響いた。他にも、「先生、今日すごく頑張っていたね。」「今日の授業とても面白かった。」と声を掛けてくれた生徒もいた。先輩の先生方は、このような生徒の成長や一言のために毎日頑張っているのだと感じた。授業の準備にはまだまだ時間が掛かり、大変に感じることも多い。しかし、その大変さを乗り越えた先に、生徒たちが理解してくれる、授業を楽しんでいると喜んでくれるという喜びがあることを、この5か月で知ることができた。

教員として、まだ課題は山積みで力不足を痛感している。それでも、一つずつ成長を重ね、生徒の成長に貢献していきたい。生徒の成長があると考えれば、教員生活における大変さにも耐えることができると確信している。いつか、英語が苦手な生徒に「英語が好きになった。」と言ってもらえるような授業ができるように、これからも努力を続けていく。

好きこそものの上手なれ

松山市立拓南中学校 吉本 萌

私に英語教師を志すきっかけを与えてくれたのは、中学時代の英語教師「N先生」だった。N先生は、GIGA スクール構想が広まる前から、電子黒板やパワーポイント等の ICT 機器を活用した授業を行っていた。黒板と向き合う時間が多かった他の授業と比べて、このような授業スタイルは新鮮で、毎回楽しみにしていたことを今でもはっきりと覚えている。また、流暢な英語で文法を解説する先生の姿を見て、「英語をスラスラ話せてすごい！私もこんな風になりたい！」と、強い憧れを抱いていた。N先生の授業で特に印象的だったのが、「自分の好きなものを紹介する」という言語活動だ。実物を持って来ても構わないと指示を受けて張り切った私は、当時大好きだった韓国アイドルの音楽アルバムを持参し、ファンになったきっかけやその魅力を熱心に語った。この経験を通して、「母語ではない言語を使って、自分自身の内面を他者に伝えることの楽しさ」こそが、英語学習の最大の魅力だと考えるようになった。

このように、私は中学時代に英語教師という職業に惹かれたが、「英語」そのものを心から好きになったのは大学時代だ。そのきっかけは、「趣味」と「海外経験」の2つの軸にある。私の趣味は、VTuber（“Virtual YouTuber”の略称）の配信を見ることだ。大学1、2回生の頃、社会はちょうどコロナ禍にあり、外出もままならない状況だった。そんな中、YouTube やその他サブスクリプションで暇を潰すしかなかった時に、英語圏のVTuber がゲームの実況をしている配信に出会った。留学を諦めていた私にとって、彼らの配信は海外の雰囲気味わえる唯一の場所だった。同時にリスニング力も鍛えられるため、一石二鳥の趣味となった。また、彼らはアメリカやイギリス、オーストラリアなど様々な国で活動している。このような英語圏の人々が日本文化に興味を持ってくれる嬉しさや、異なるアクセントの英語を聞き取る面白さを初めて感じたのもVTuberのおかげだ。やがて、その学びを現実のものにしたのは、約2年前のオーストラリア留学だ。新型コロナウイルス感染症の状況が落ち着き、「留学するなら今しかない！」という思いと、周囲の励ましもあり、人生初の海外へと足を踏み出した。4週間の滞在中、毎日全ての出来事が真新しかった。ホームステイや語学学校を通じて国籍問わず多くの友人ができ、一生忘れることのない思い出となった。特に記憶に残っていることは、ホストマザーとお風呂や帰宅時間について熱く議論した場面だ。異なる文化を持つ人と一緒に生活することの難しさを実感し、それに向き合うことで自分自身の精神的な成長につながったと思う。

これらのかけがえのない経験があったからこそ、私は英語教師の道へ進んだ。私の座右の銘は、「好きこそものの上手なれ」である。何事も「好き」という気持ちがなければ、上達することは難しいと考えている。英語への愛情を忘れず、学ぶ姿勢を持ち、子供たちに英語を学ぶことの楽しさを伝えられる教師になるため、これからも日々努力を重ねていきたい。

安心して挑戦できる授業を目指して

松山市立内宮中学校 西沖 魁晟

私は昨年、広島県で一年間の非常勤講師を経て、今年度より愛媛県で英語科の教師として勤務している。勤務する場所が変わると、子供たちの雰囲気や教育の進め方に違いが見えてきた。特に、愛媛県では ICT 教育が積極的に推進されており、教師の業務負担を軽減するだけでなく、生徒一人一人の個別最適な学びにつながっていると感じる。授業の中で 1 人 1 台端末を用いた発表や、オンライン教材による振り返りを取り入れることで、生徒たちは自分の考えを表現する機会が増え、学習意欲を高めている。教育環境の変化を実感しながら、私自身も新たな授業づくりに挑戦している。

私は大学時代に短い期間ではあったが、海外で働いた経験がある。現地の学校で子供たちと関わり、暮らしや教育の在り方に触れたことは、教師としての根幹に影響を与えている。文化や生活の違いを肌で感じ、子供たちの置かれている環境がいかに関わり、結びついているかを学ぶことができた。一方で、人見知りで内気だった私は、言葉が十分に通じない環境で生活することに大きな不安を抱え、なかなか自分を表現できずに苦労した。しかし、この経験が今の私の教育観を形づくっていると考える。言葉が通じずに戸惑ったこと、文化の違いに直面して悩んだことは、生徒たちが英語を学習する際に抱える不安や抵抗感と重なる部分がある。だからこそ、私は「安心して挑戦できる授業」を何よりも大切にしたいと考えている。

また、海外での生活を通して、「英語を学ぶことは単に文法や語彙を覚えることではない」という実感を得た。異なる文化の中で暮らすことで、言語は人と人をつなぐための手段であり、自分の思いや考えを相手に伝えるための大切な道具であることを学んだ。私は自分の可能性を広げてくれるものが英語だと考えている。授業においても、知識や技能の向上だけにとどまらず、「なぜ学ぶのか」「学んだことをどう活用するのか」という問いを常に意識し、実際に英語を使って会話することや ALT との会話を意識させて、生徒とともに英語を使う時間を大切にしたい。

愛媛県での勤務を通して感じるのは、生徒たちが非常に素直で、学びに対して真摯であるということである。授業中に新しい活動に挑戦するときも、多少の戸惑いはありながらも一生懸命に取り組む姿勢が見られる。その姿勢に応えるためにも、私は「分かりやすく、挑戦したくなる授業」を目指して準備を重ねている。

私の将来の目標は、海外に羽ばたいていく生徒を育てることである。大学時代に海外で活動していた経験から、世界の人々と国際問題や課題について語り合う意義を強く感じた。グローバル化が進む現代において、英語は単なる教科の一つではなく、生徒たちが将来、自分の考えを世界に発信し、他者と協働するための基盤であると考えている。そのために、授業の中で自分の言葉で表現することを意識した指導を行い、生徒一人一人が自分の可能性を広げられるよう支援していきたい。

新規採用としてまだまだ学ぶことは多く、日々試行錯誤の連続である。授業準備や学年での仕事の面で課題に直面することもあるが、その一つ一つが教師としての成長につながっていると感じている。先輩教師の助言に学びながら、生徒の成長に寄り添い、共に学ぶ姿勢を忘れずに歩みたい。

理想と現実の間で育つ指導力

松山市立小野中学校 佐藤 彰

私は、昔から英語を学習することが好きであった。中学校、高等学校と、英語の授業を通して新しい文法を理解し、多くの単語を覚え、英語で表現することの楽しさを覚えたからである。また、学校の定期テストでも良い結果を収めることができ、英語は得意な教科となった。今思えば、得意な教科ができたことは自分自身の自信となり、他の教科の学習にもよい影響を与えていたように感じる。実際に海外旅行に出掛け英語を使って現地の人とやり取りをしたり、生活の中で英語を話さなければならない場面に直面したりすることはなかったが、ただただ英語の学習をするのが好きであった。

今年、新規採用教員として教壇に立ってみると、私が考えていた理想の授業と生徒が求めている理想の授業とに大きなギャップがあることを痛感した。私は授業で、文法や語彙の知識を正確に伝えることで生徒は理解が進み、自然と英語を好きになってもらえると考えていた。ところが、知識や技能を教え込む授業では生徒の表情は輝かず、英語を学ぶことへの興味を高めたり、楽しさを感じたりすることにつながらないことに気付いた。知識や技能が身に付くことで、生徒の学習意欲が高まるのではないということを改めて思い知らされたのである。授業の中で、生徒の表情が輝く場面を作りたいと考え、試行錯誤しながら多くの活動を取り入れた授業展開を考えてみた。自分で工夫を凝らした授業を行ったときの生徒の笑顔や積極的な発言は、大きな励みとなった。また、生徒から「先生の授業は面白い。」と言われたときは、とてもうれしかった。それと同時に、「英語の知識や技能を身に付けさせること」とともに、「英語を学ぶこと自体が楽しいもの」と生徒に感じてもらうことが大切であると実感した。

日々の教材研究や研修を通じて、私は少しずつ授業改善の方向性を見直している。私は、自分自身が「英語に関する知識や技能が増えること自体が楽しい」と感じて英語の学習に臨んでいたが、今自分が目の前にしている生徒は、そこに魅力を感じているわけではない。生徒は、自分の考えを英語で表現できたり、友達と英語でやり取りできたりする中で、学ぶ意味を見いだしている。だからこそ、アクティビティやペアワークを取り入れ、生徒自身が「できた。」と思える経験を積み重ねられる授業づくりを意識していきたい。もちろん、知識や技能の定着は軽視できない。文法に関する知識や語彙の基礎がなければ、英語での発信も受容もままならないからである。知識と技能、そして主体的に学ぶ楽しさをどのように結び付けていくかが大切である。私自身、英語を学習することを愛してきたからこそ、その良さを生かしつつコミュニケーションを取る「ツール」として使う面白さも伝えられる教師になりたい。

今後の課題は、「知識・技能の定着」と「コミュニケーションツールとしての英語」とのバランスを授業の中でいかにとっていくかである。生徒にとって、英語の学習が単なる受験科目の学習となるのではなく、自分の世界を広げるための一つの扉であると感じてもらえるように、授業改善に努めていきたい。そして、「英語を学ぶことは楽しい。」と実感できる場면을積み重ねることで、将来、生徒が自分の力で新しい世界に踏み出せるよう後押ししていきたい。新規採用教員としての1年目は、毎日が学びと挑戦の連続である。理想と現実の間で戸惑うことがあるが、だからこそ授業改善に全力で取り組むことで、生徒の成長と真剣に向き合うことができるのだと思う。これからも「知識・技能の定着」と「コミュニケーションツールとしての英語」の両面から楽しめる授業づくりを目指し、学び続ける教師が体現できるようにしたい。

Where there' s a will, there' s a way

松前町立松前中学校 大西 順稀

私は中学1年生の頃、英語に強い苦手意識を抱いていました。授業が始まる度に気が重くなり、教科書に並ぶ英単語や文法は、自分とは縁遠いもののように感じられました。しかし、そんな私に転機が訪れたのは中学2年生の時です。ある定期テストをきっかけに、友人と英語の点数を競うことになり、「どうしても勝ちたい」という思いが芽生えました。他の友人に教えてもらいながら学習を重ねた結果、初めて高得点を取ることができました。その成功体験が、英語に対する印象を大きく変える転機となりました。英語が「分からないもの」から「分かるようになったもの」へと変化し、次第に学ぶことが楽しくなっていたのです。

その後、高校に進学してからは、英語が最も得意な教科となりました。授業で扱う英文や長文の読解にも積極的に取り組み、英語を使って自分の考えを表現することに喜びを感じるようになりました。この頃から、英語の小説を読むようになりました。初めて読んだ、*And Then There Were None*『そして誰もいなくなった』は、単語の意味を調べながら、かなりの期間を経て読破しました。そして、英語をもっと深く学びたい、そして将来は英語を教える立場になりたいと思うようになりました。高校時代のこの経験が、英語教師を志すきっかけとなりました。

大学時代には、英語で書かれた漫画を読むようになりました。物語の世界に没頭しながら、自然と英語表現や語彙に触れることができました。特に印象深かったのは、外国人の友人と漫画の内容について英語で語り合った経験です。コロナ禍であったため、ビデオ通話越しに、夜遅くまで登場人物の物語の考察について意見を交わす中で、言語を超えたコミュニケーションの楽しさを実感しました。ここで私は、英語は単なる教科ではなく、人と人をつなぐ架け橋であることを、身をもって理解することができました。

そして現在、英語教師として新たな一步を踏み出しました。1学期を終えた今、教えることの難しさと奥深さを痛感しています。授業を通して生徒の反応を見ながら、自分の伝え方や言語活動に改善の余地があることを強く感じました。生徒一人一人の理解や興味に寄り添いながら、より良い授業をつくるためには、日々の振り返りと工夫が欠かせません。教えることは、単に知識を伝えるだけでなく、生徒と共に学び、成長していく必要があると実感しています。また、私は英語の学習を「より良いコミュニケーションを図るための方法の一つ」として捉えています。文法や語彙の習得はもちろん重要ですが、それ以上に、生徒が英語を通して「誰かと話したい」「自分の思いを伝えたい」と感じられるような授業づくりを目指しています。私自身がそうであったように、ちょっとしたきっかけで英語への印象は大きく変わります。だからこそ、生徒一人一人が英語を勉強して良かったと思ってもらえるように、日々の教育実践に取り組んでいきたいです。

今後の教員生活において、生徒と共に英語を通して、話し合い、学び合うことの意義を分かち合っていけるよう努めていきたいです。

挑戦をやめない

宇和島市立城東中学校 往見 真咲

中学時代の恩師に憧れて目指した、英語教師という夢。「英語が好き」という思いは、中学時代から変わることはなかった。そしてこの春から、私は中学校の英語教師として、教師の道を歩み始めた。地元を離れて初めての生活。何もかもが新鮮で、毎日が学びの連続である。

私に確かな自信を持たせてくれたものが英語だった。私にとって、英語は得意教科の一つだった。中学3年生の時、町内の中学校英語弁論大会に出場する機会を得た。非常に嬉しくて、当時の夏休みは受験勉強よりもスピーチの練習に一生懸命になり、毎日多くの時間を費やしたことを今でも覚えている。語と語のつながりやアクセント、イントネーションなどに苦戦したが、ALTが録音してくれたスピーチの音声と自分の話す英語を比べることで、より流暢な英語に近づけようと努力した。スピーチのタイトルは、「To succeed, you must try.」であった。「勝つための最善の努力は、どんな時もやめてはいけない。」、元プロ野球選手の王貞治さんの名言から始まるこのスピーチ。小学3年生の頃から7年間続けてきたバレーボールを通して学んだことを英語で伝えようと決めた。普段の学校生活では物静かで、おとなしい性格だった当時の私。英語を話すとなると普段の何倍以上の声で、身振り手振りを付ける話す姿に、周囲の友人や教師は驚きを感じていた。一方で、私は大勢の人の前で英語を話すことの楽しさを味わった。喜多郡にある、内子座で行われた、英語弁論大会の本番。ステージに上がると一斉に向けられる照明の光と観客の視線に緊張しながらも、自分の伝えたい思いを一生懸命に発表することができた。目指していた一位には惜しくも届かなかったが、やり切ったという達成感と大きな自信を獲得した。あの時から7年経った今でも、スピーチの内容は鮮明に覚えており、一人時間にふと思い出すことがある。

日本において、私たちが日常生活で英語を必要とすることは少ないのが現状である。英語は学校の授業で学習するだけの学問になってしまい、学習した英語を実生活の中で活用する機会はほとんどない。だからこそ、英語の授業での言語活動において、実際に英語を使う場面や状況を作り、目的意識と相手意識を明確にすることで、様々なコミュニケーションの体験を積み重ねることが重要であると考えます。英文法や英単語を覚えるインプットから、自分が持っている知識を他者に発信するアウトプットへの過程を大切に、日々の授業において一つ一つの活動の充実を図っていく。また、英語の歌や動画など豊富な学習素材を有効に活用することで、生徒が生きた英語に触れ、楽しみながら学ぶことで、英語に対する興味や関心を高め、学習意欲の向上にもつなげたい。さらに、ALTとの授業は生徒にとって異文化に触れる絶好の機会である。ALTの自国の文化や価値観、日本の文化との違いについて取り上げることで、生徒の異文化に対する興味や関心を高めるとともに、授業外においても生徒がALTと主体的に交流することを通して、異文化コミュニケーション能力の育成を目指したい。

中学校の英語教師として、どの生徒にとっても「できた」「分かった」を実感できる授業を目指し、生徒のやる気や自信の獲得につなげたい。「To succeed, you must try.」この言葉を胸に、明るい笑顔で目の前の生徒とともに挑戦し続ける。

10年越しの夢叶い

宇和島市立城北中学校 鍋田 未夢

10年前、中学生だった私の将来の夢は「中学校の先生になること」だった。今年の4月、念願だった夢が叶い、教壇に立った私は喜びと緊張で胸が一杯だった。大学を卒業し教職大学院に進学した私は、そこでたくさんのことを学び、それを授業で実践できるとやる気に満ち溢れていた。初めて教壇に立った私は、期待の目で私を見つめる生徒たちを見て、「一人でも多くの生徒が英語を楽しいと思ってくれるように頑張るぞ」と気合を入れたことを覚えている。そこで、まずこれまで教育実習で授業観察をさせていただいた先生方の姿を思い出しながら、自分の授業スタイルを作ろうと奮闘した。毎日生徒の反応を見て、「これはうまくいかなかった。どうすれば分かりやすくなるだろうか、興味を持ってもらえるだろうか。」と試行錯誤をした。実際に授業をするのと見るのでは大きく違って、うまくいかないことばかりだった。しかし、生徒が楽しそうに活動をしている時や「分かった！」と言っている瞬間を見た時に、頑張ってよかったな、次も頑張ろうとやる気が湧いてきた。まだまだうまくいかないことばかりで、落ち込む日もあるが、諦めずに生徒と一緒に成長していきたい。

現在課題に感じていることは、生徒に自分の力で英語を書く力を定着させることである。1学期、3年生は日本文化、エシカルな商品の紹介、絶滅危惧種について記事をまとめるなど、タブレット端末を用いて英語で自分の考えを表現する活動をさせてきた。その中で、難しい英文を書くために翻訳アプリを使ってしまう生徒がいた。その時に、先輩の教師から聞いた言葉を思い出した。「英語の基礎なしに、翻訳アプリを使って書いた文章は頭に残らない。そして、そこで作った文章はもう一度自分で書くことができない。」翻訳アプリを使えば、一定のクオリティの文章ができる。しかし、それは生徒の力にはなっていないのではないかと、生徒がこの先、英語でコミュニケーションを取ろうとした時、自分の言葉で表現をすることができなければ意味がないのではないかと考えた。翻訳アプリを場面に応じて使うことは悪いことではない。しかし、英語の基礎がないままに使わせてしまうことは、生徒の英語力向上の機会を奪っていると思った。2学期の目標は「AIを有効活用するために、自分の力で英語を書く力を身に付けさせる」ことである。少しずつ自分の力で英語を書く力を身に付けさせるために、できることを続けていきたい。

私が今後目指していきたい教師像は、確かな英語力を付けさせながら、生徒が「もっと英語を学びたい！」と思えるような授業をする教師である。英語力の面では、生徒にテストで得点が取れるという実感を与えられること、望んだ進路実現に寄与できることを目標としたい。そして、日々英語を学ぶ楽しさ、英語でのコミュニケーションの楽しさに気付かせたい。そのために、先輩の先生方から学ばせていただいたり、英語や教授法について勉強したりすることを続けていきたい。「中学校の先生になりたい」と思っていた中学生の私に胸を張れるように、日々の授業を妥協することなく頑張っていきたい。

Inspiration to Application

Shigenobu Junior High School, Toon City, Yolexelle Dawa

My name is Yolexelle Dawa, but I prefer to be called Yolex, as it is easier to pronounce and sounds like a well-known watch brand, which makes it more memorable. I am from the Philippines and hold a Bachelor of Arts in English Language. I have been an English teacher for five years and am currently in my second year as an ALT in Toon City, Ehime. In my first year, I was assigned to five different schools. This year, I am working at four entirely new schools, three of them are elementary schools, and the fourth is Shigenobu Junior High School, which is roughly twice the size of all five of my previous schools combined.

According to Brown (2007), English as a Foreign Language (EFL) refers to learning English in a country where it is not the dominant language. Thus, acquiring a new language can be particularly challenging in a monolingual country like Japan. Nearly everything, from public signs and media to school environments and official communications, is primarily in Japanese, with English appearing only occasionally. This deepens my appreciation for the country's strong sense of cultural unity. Moreover, the widespread use of a single language like Japanese simplifies communication and offers a sense of ease and familiarity for its speakers.

In EFL classrooms, lessons are primarily led by a Japanese Teacher in English (JTE) working in partnership with an Assistant Language Teacher (ALT). Together, we aim to make lessons engaging, relevant, and memorable for students by incorporating real-life situations, such as small talks, vocabulary exercises, group brainstorming discussions, simple sentence construction, and interactive games like Jeopardy and Bingo. A variety of teaching approaches are used to align with students' interests and enhance their motivation to learn the language.

In one of our classes, while many students were eager and motivated to learn English, there were also a few who remained passive, viewing it merely as a required subject in the curriculum. When asked the question, "Do you like English?" one student's response stood out to me: "No, I don't. I don't use it." That honest remark sparked my determination to find more effective and meaningful ways, as an ALT, to help students develop a genuine interest in and appreciation for the English language.

As an ALT, I support my students' language learning in several ways: strengthening communication with my JTEs during lesson planning and classroom instruction; fostering a positive, encouraging atmosphere where students feel comfortable speaking and having fun; and connecting with students by learning about their interests, such as tennis, online games, dancing, or singing. I truly appreciate the effort my Japanese students put into communicating with me in English, from simple greetings and words to full sentence construction. Day by day, they are learning new vocabulary and gradually applying it in our casual conversations, both inside and outside the classroom. Through this process, ALTs can serve as a source of inspiration for students in the application of their English-speaking skills.

I believe that because they are still young, students have a strong ability to acquire new languages. Since English is already part of their curriculum, they have the opportunity to build a solid foundation early on. Moreover, Japan's growing status as a global tourist destination makes English a valuable skill. Improving English proficiency can not only promote tourism but also empower students to communicate confidently when traveling abroad. Developing this ability will equip them for broader cultural exchange and future opportunities.

My Experiences as an ALT

Asakura JHS, Imabari, Sakurako Vale

Standing in front of the faculty and staff of Asakura Junior High School, forty pairs of expectant eyes turned to me as the principal smiled warmly and nodded at me to introduce myself. I complied brightly, if a little nervously, unaware at the time that this introduction would be the start to two of the most fulfilling years of my life.

My name is Sakurako Vale, and I am originally from Houston, Texas, in the United States. For the past two years, I have been living and working in Imabari City as an Assistant Language Teacher (ALT) at two elementary schools and one junior high school. Across my three schools, I assist in teaching English to over seven hundred students whose ages range from six to fifteen years old. I am lucky to work with the most dedicated Japanese Teachers of English (JTEs) and passionate students who motivate me every day to be a better leader, teacher, and communicator. Participating in the Japan Exchange and Teaching Program (JET Program) has allowed me to not only fulfill my childhood dreams of living in Japan, but also allowed me the rewarding opportunity to serve my students as an English teacher and cultural ambassador from the United States.

I knew from a young age that if I had the opportunity to, I wanted to one day live in Japan. Growing up in a bilingual household where I spoke both English and Japanese with my parents, and traveling to my mother's native Okinawa every other summer of my life, has fostered my deep-rooted understanding and respect for the Japanese language and culture. It's been one of the greatest joys of my life to help impart useful knowledge about the English language and teach my students things about American culture and society that they didn't know! A fun example is the Christmas lesson I do with my students before we leave for winter break. As part of the lesson, I ask my students to guess which one of these three foods—Kentucky Fried Chicken, ham, or turkey—is not typically served at American Christmas dinners. Every year, the majority of my students guess ham or turkey, and explaining that Kentucky Fried Chicken is not associated with the Christmas holiday or season in the United States is always shocking to them! I make sure to explain that even the same holiday can be celebrated differently depending on the country or culture, and though this is a small example, my hope is that through bridging such gaps across languages and cultures, I have helped to open my students' eyes to how big and diverse the world is!

In addition to teaching my students English, another amazing aspect of my time in Japan as an ALT has been how involved I have been with the local community here in Imabari City. Outside of teaching English at my schools, I voluntarily teach adult English conversation classes (英会話) four times a month. While working with adult students is much different from working with younger students, I have felt an equal passion and dedication to studying the English language from both age groups!

Imparting practical knowledge about both the languages I grew up speaking and sharing fun and useful facts and information about what life in America is like to both my adult and younger students has been some of the most rewarding experiences of my time in Japan. Serving the local community in my placement city of Imabari has allowed me to fulfill my childhood dreams of living in Japan and fostered my lifelong interest in international relations. While my time as an ALT must eventually come to an end, I feel eternally grateful to this position and all my experiences in Japan for allowing me to discover my commitment to pursuing a career that will allow me to continue to help bridge gaps across different languages and cultures.

Building Successful Teaching Relationships

Uchiko JHS, Ozu city, Gabrielle Vasques

Hi! I'm Gabi from Texas, United States. I have been working in Ehime as an ALT (Assistant Language Teacher) at Uchiko Junior High School for one year. Effective team teaching is more than just sharing a classroom. It is a collaboration that can enhance the learning experience for students. This journal submission outlines key strategies for ALTs and JTEs (Japanese Teachers of English) to optimize their role and build a successful teaching relationships

The JTE is the lead instructor, responsible for the curriculum and overall lesson objectives, while in my understanding and experience the ALT's role is to act as a vital support and a bridge to authentic English usage. However, a common challenge is a lack of advance notice regarding lesson plans. ALTs are often informed of their tasks only a day before, or sometimes even on the day of the lesson. This requires them to generate examples and explanations on the spot, which, while possible, may not be as effective as those developed with adequate preparation. A clear, ahead of time schedule detailing the units, grade levels, and specific activities would be highly beneficial, ensuring the ALT's contribution is fully optimized and students get relatable and easy to understand examples.

Furthermore, authentic spoken English, particularly American English, often diverges from standard academic rules. Everyday conversations may feature natural elisions and a casual tone that is very different from formal writing. Therefore, it is important for JTEs to communicate in advance what kind of English, whether formal or conversational, they would like the ALT to model. This clarity ensures that the examples provided are directly aligned with the lesson's objectives and students can easily understand.

As an ALT one of my favorite things to do is when I am able to play games with the students. Leading interactive activities, speaking games, and role playing exercises that encourage students to use English in a low pressure, fun environment is fun and I believe essential for building students' confidence and fluency. I also really enjoy sharing my culture through English, personal anecdotes, discussing traditions, or explaining customs from my home state. By sharing my cultural experiences it makes learning the language more meaningful and relatable for students. It also gives me a chance to connect with the students which I feel at the Jr High level can be challenging since they must follow strict rubrics on a daily basis.

My time at Uchiko Junior High School has been defined by a deep and rewarding engagement with my role as a linguistic and cultural resource. I am particularly fortunate to work within a community where the teachers, students, and community members approach everything with excellence and an open mind. A highlight of my experience has been the opportunity to be included in school activities beyond English class. For example, when I was invited to help students make decorations for a local festival, they not only got to practice their English in a natural, casual setting but also built a stronger bond with me, which ultimately enhances our teamwork in the classroom. This rewarding experience underscores the importance of the ALT's role in fostering both language acquisition and meaningful cross cultural connections.

Teamwork makes the dreamwork

Honai JHS, Yawatahama city, Tenele Zwane

My name is Tenele Zwane and I am originally from Johannesburg in South Africa. For the past year I have been working in Honai as an ALT at three elementary schools and one junior high school. In that year, I had wondered how I could be useful to the teachers I worked with. Before I came to Japan, I had taught English online to adults, so working with a teacher would give me a new challenge, perspective and experience. When I was assigned to my schools, I assured the JTEs that I would do my best to serve them and the students. I have learned that experience of working with teachers depended on several aspects.

The first thing I did was to learn about the JTE's style of teaching and their teaching philosophy. That is the lens through which I approach my role in the classroom. Some JTEs preferred a more analogue style of teaching, whilst others fully embraced the use of technology in the classroom. It allowed me to observe how effective human interaction is compared to using technology to learn English. Some JTEs incorporated warmup games or small talk to get the students' focus and attention, whilst others dove straight into the lesson and pick up where we left off. By learning the JTE's style of teaching and teaching philosophy, our teamwork could begin.

The second thing I learned was building a connection with the JTE. Getting to know them a little bit everyday made me grow to like them and enjoy working with them. In the classroom, I was able to participate with the students differently. Some JTEs wanted me to work together with the students during classroom activities or spend time with a student that was falling behind. Other times, the JTE and I would demonstrate what to do and let the students follow suit. In some cases, JTEs encouraged the use of tablets and translation apps to do their work, but I did not always find this method to be authentic to what the students truly thought or felt. So, I would step in to check if it sounded natural to a native speaker. Some translation apps used advanced English and that wasn't suitable for the students' level nor was it useful to be used in daily conversations with me or with each other. I found that using the phrases in the textbook or vocabulary list was more helpful because it ensured that their sentences were accurate and within their level.

The third thing I learned was to have feedback discussions with the JTE. We would review written assignments that the students submitted, the use of AI in language learning, discuss ways to use the textbook material in real-life scenarios, and create an activity that applies to the lesson topic. I would also share methods and exercises that helped me write, speak, read and listen to English better when I was in school. These discussions showed me that the JTE and I trusted each other and that we were willing to adjust to improve the learning experience of the students.

As an ALT, building a sense of teamwork with JTEs takes time, understanding and intention. My experience of team teaching has been wonderful. I would encourage all ALTs to be intentional with their JTEs and have a 'teamwork makes the dreamwork' mentality. It can do wonders for you, the JTE and the students. If the students see that the ALT and JTE enjoy working together, it can impact the classroom experience in a positive way.

VII 事務局だより

- 令和7年5月28日（水）愛媛県教育研究推進委員会 於 愛媛大学附属小学校
＜議事＞

- 1 開会の言葉
- 2 助言者紹介
- 3 あいさつ 愛媛県教育委員会義務教育課 指導主事 渡部 匡
- 4 自己紹介
- 5 役員紹介
- 6 協議
 - (1) 本年度の研究方針について
 - (2) 本年度の事業計画について
 - (3) 研究推進について
 - (4) その他
 - (5) 指導・助言 愛媛県総合教育センター 指導主事 松田 詩織

評価研究、行事、編集の3つの専門部会で年間を通しての活動計画を立てました。

- 令和7年7月30日（水）第10回愛媛県外国語教育研修会

講師 愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 教授 中山 晃 先生

演題 「外国語教育について考える1日」

本講演では、小中接続期の英語学習の課題と、過去から現在への指導法の変遷を踏まえた英語教育の在り方が示されました。小学校での発話中心の学習と、中学校での読解・文法とのギャップについても議論され、書く練習の扱いに悩む現場の声が共有されました。また、参加者はオーラル・アプローチの指導方法を体験することを通して、パターンプラクティスと言語活動とのバランスの大切さを再確認する機会となりました。英語教育において完璧な指導法はなく、学習者の多様性を踏まえた個別最適な支援、丁寧な教材研究、学校全体での取組が今後更に求められると教えていただきました。

- 令和7年9月20日（土）高円宮杯第77回全日本中学校英語弁論大会愛媛県大会

本大会には、各校から1名ずつ選ばれた28名の代表生徒が参加しました。出場者たちはこれまでしっかりと練習を積み重ねてきたことが伝わる堂々とした姿で、自分の思いや考えをしっかりと言葉にして発表していました。どのスピーチにも強い主張と熱意が込められており、聞く人の心に深く響く、非常に充実した大会となりました。

上記の内容で、先生方の温かいご協力とご支援により本年度の全行事が終了しました。心よりお礼申し上げます。

愛媛県教育研究協議会外国語委員会中学校部会事務局長 折本 崇

VIII 全英連和歌山大会 報告

- 令和7年11月14日（金）～15日（土）全英連和歌山大会

於 和歌山県民文化会館・和歌山市立向陽中学校

11月14日（金）9:30～17:05 全体会（和歌山県民文化会館）

1 総会

- 2 基調講演 演題：「学びのWAをつなぐ英語教育－「ことば」と「こころ」が離れない授業を目指して」

講師：大阪教育大学 多文化教育系 教授 加賀田 哲也 氏

HLT (Humanistic Language Teaching : ヒューマニスティック・ランゲージ・ティーチング)の視点から示唆に富む講演だった。専門とするHLTの観点から、「英語教育は言語力の育成だけでなく、学習者の人格形成や人間教育に寄与することが求められる」と強調された。特に、生成AIが急速に教育に浸透していくこれからの時代においてこそ、英語教育が果たすべき役割は大きいと指摘された。講演は、これからの英語教育が向かうべき方向を改めて考える貴重な機会となり、AI時代における「人としての学び」の重要性を再認識させられる内容であった。

3 授業実演

- (1) 小学校（動画発表）

発表者 和歌山市立岡崎小学校 教諭 横矢 晴美

「This is my hero」の授業では、台湾の姉妹校やALTに向けて、自分のヒーローを紹介するという明確な目的のもと、児童がスライドを用いてグループ内で発表し合う活動が展開された。導入場面では、文字指導を丁寧に積み重ねる姿が際立っていた。音を聞いて、手本を見ないで書く→フォニックスを意識した全体発音→大型提示装置を使った書き方の確認→全体での読み、という一連の流れには、中学校での指導経験を踏まえ、小中接続における文字指導の重要性を強く意識する横矢先生の信念が感じられた。授業全体として、クラスの規律がよく整っており、友達が発表している時には黙って真剣に聞くなど、日頃の学習訓練の成果が随所に見られた。

- (2) 中学校（舞台発表）

発表者 みなべ町立南部中学校 教諭 虎伏 泰資

ミニ・ディベートの授業が公開された。冒頭ではスモールトークを取り入れ、部活動をテーマとした身近な話題でウォームアップを行い、生徒の緊張を和らげつつ授業の目的へ自然につながる工夫が見られた。質問内容も段階的に比較表現へと発展させ、最終的なディベート活動を見据えた丁寧な授業デザインが印象的であった。一方で、スモールトークや読みトレーニングといった帯活動に時間を多く割いたため、全体としてタイムマネジメントに課題

はあったが、英語の授業を楽しむ生徒と教師の姿がすばらしかった。

(3) 高等学校（動画発表）

発表者 和歌山県立耐久高等学校 教諭 岩崎 祐矢

展開の課題1では、「When do you feel love?」という問いを基に、ペアやグループで考えを交流し、クリアできたグループは前方の名簿にチェックを入れに行くという達成感が味わえる仕掛けが取り入れられていた。課題2では、生徒自身が「幸せを感じる時」について書いた英文をもとに、ペアでやり取りを行い、follow-up questions を促す活動が展開された。課題3では、課題1・2を踏まえて「What is love?」という問いに向き合い、自分なりの「愛」の定義を考える深化活動が行われた。教師と生徒のやり取りの中には、課題内容を再度説明する必要がある場面も見られ、日々の授業運営における苦労も垣間見えたが、生徒たちは総じて素直で、教師の言葉を真摯に受け止めようとする姿が印象的であった。

11月15日（土）9:30～12:55 分科会 （和歌山県立向陽中学校・高等学校）

1 分科会 第1部

(1) 第3分科会 生成AIの活用によるアウトプット力の改善

発表者 和歌山県立向陽中学校 教諭 高橋 健太

助言者 敬愛大学 教授 向後 秀明

生成AIを活用しながら、対話の質を変えていく提案であった。数人の生徒に絞って、その変化を動画で流すことによって、対話の質が高まった生徒がいることを実感できた。助言者からは、生成AIに頼りきりでは、生徒の英語力は落ちるばかりであることと、いかに効果的に授業等に取り入れるかが大切であると指導があった。

(2) 第5分科会 生徒が主役になれる、生徒の主体性を育む授業デザイン

発表者 橋本市立高野口中学校 教諭 徳山尚太郎

助言者 岐阜大学 准教授 瀧沢 広人

生徒の声を起点に授業をつくることを大切に、「生徒が話したい・やってみたい」と思える活動の開発を重視していることの提案であった。英語の授業で生徒同士が思いや考えを伝え合うことは、まさに「他者と関わりながら価値を生む主体的な学び」であり、この経験が自己肯定感や自己効力感の育成につながると述べられた。助言者からは、主体性とは、「生徒が教師のつくった授業に参加すること」ではなく、「生徒自身が学びを創り出すこと」であるという視点が強調されるべきだと示唆があった。

(3) 第6分科会 インクルーシブな英語授業の設定と実践

発表者 白浜町立日置中学校 教諭 辻 彩香

助言者 武庫川女子大学 教授 村上 加代子

学力差が激しいクラスの授業改善、全員が達成感を持って学べる英語授業の実現を目指し、基礎的リテラシー指導（音韻意識やフォニックス指導）やデジタル教科書や動画を用いた授業実践の発表であった。音と文字がつながりにくい生徒やディスレクシアではないかと思われる生徒に対してのアプローチ方法の一つとして、とても興味深い発表であった。助言者からは、音素操作、音節操作で音と文字のかたまりを意識させて、読み書きの向上につなげていく活動は、効果的であると示唆があった。

2 分科会 第2部

(1) 第16分科会 中学校授業提案 論理的、批判的思考を高める指導

発表者 みなべ町立南部中学校 教諭 虎伏 泰資

助言者 和歌山市立紀之川中学校 校長 植西 仁美

授業の基盤にあるのは、継続的に取り組む「帯活動」であり、生徒が英語に向き合う時間を確保しながら、瞬発的に考え、表現する力の土台をつくる工夫が随所に見られた。助言者からは、論理的・批判的思考力は英語科のみで育成できるわけではなく、今の生徒に必要な力を明確にし、学校全体で生徒の人格形成にあたるのが重要であると指導があった。

(2) 第17分科会 パフォーマンステストで見える学び

発表者 和歌山市立東中学校 教諭 大野 傑

助言者 大阪城南女子短期大学 教授 菅 正隆

評価規準を生徒にループリックやCAN-D0リストでしっかりと示し、生徒の目標及び意欲を高める取組ができていた。「My Hero」というタイトルでの1年生のスピーチの発表の様子が見られたが、未履修の表現を使ったレベルの高いスピーチをする生徒から、単語レベルでようやく人に伝えることができる生徒まで様々であった。それでも、生徒は意欲的に活動していた。助言者からも、生徒に活動の前に目標を持たせることの大切さについてのアドバイスとともに、学期に2回はパフォーマンステストをする必要があると指導があった。

(3) 第19分科会 学習指導要領の趣旨を踏まえた英語科における学び合い学習の実践事例

発表者 和歌山市立河北中学校 前校長 戸川 定昭

助言者 岐阜大学 准教授 瀧沢 広人

教員出張等の穴埋めに、校長が行う授業を公開し、学習指導要領の目標を踏まえ、かつ和歌山市教育委員会が推奨している、学び合い学習の要素を取り入れた指導の事例として、勤務校の教職員に示すという研究実践だった。教師が生徒の限界をつくらず、まずは生徒を信じて生徒に活動を任せてみるという考えに改めて指導の在り方の重要性について実感した。助言者からは、教師主導ではなく、生徒自身が課題に向き合っている姿勢を育てることが大切だと指導があった。

令和7年度 愛媛県教育委員会・愛媛県教育研究協議会外国語委員会（中学校）役員名簿

義務教育課 渡部 匡 中予教育事務所 音田千恵美
 東予教育事務所 矢野 誠治 南予教育事務所 中村 慎吾
 歴代指導主事 平井 亀雄、渡部 富光、二宮 宏、三好富士夫、片岡喜代見
 保手浜勝彦、垂水 勉、吉田 太、上村 悦男、鈴鹿 基廣
 客野 英司、神野 浩彦、坂本 博法
 歴代委員長 八木 昌一、篠崎 巖、三好 嗣郎、富田 英男、中野 繁
 二宮 宏、武井 邦夫、大森 理、一色 三喜、岡山 春吉
 亀井 壽一、八塚 哲夫、垂水 勉、楠本 雅人、相原 孝裕
 正岡 成教、畦田 祐二

愛媛県教育研究協議会外国語委員会（中学校）

委員長	豊島 政一	久谷 中	副委員長	桐山 真美	清水 小
副委員長	畦田 祐二	大洲南中	副委員長	神野 浩彦	久米 小
副委員長	水口 雅彦	三瓶中	副委員長	加藤 啓子	新居浜南中
副委員長	新田 敏之	美川中	副委員長	乗松 哲也	椿 中
副委員長	伊賀上 知晴	鴨川中	事務局長	折本 崇	砥部中
事務局次長	濱田 眞基子	余土中	事務局次長	北川 智都	港南中
事務局次長	安倍 稔彦	北条北中	事務局次長	井手 駿佑	垣生中
事務局次長	片山 信吾	日浦中	事務局次長	片山 祐貴	重信中

専門部	支部	氏名	学校名
評価研究部長	附属	向井 俊博	愛大附属中
評価研究副部長	附属	福岡 拓也	愛大附属中
編集部長	松山	片山 信吾	日浦中
編集副部長	上浮穴	川西 奈緒	美川中
編集部	新居浜	宇野 恵	中萩中
	西条	村上 太郎	西条南中
	今治・越智	羽藤 りえ	朝倉中
	東温	馬越 成輝	重信中
	喜多	阿部 純奈	内子中
	八幡浜	上甲 照子	保内中
	南宇和	岩崎 浩美	城辺中
行事部長	松山	高田 真奈実	勝山中
行事副部長	大洲	井上 恵梨香	新谷中
行事部	四国中央	伊藤 由美	三島東中
	伊予	高城 有佳	双海中
	西宇和	浅野 とくな	伊方中
	西予	川崎 あゆみ	宇和中
	宇和島	末光 展也	城北中
	北宇和	清家 怜	広見中

編集後記

私には3歳の娘がいます。平日は毎日、幼稚園に通っており、日に日にたくましく成長しています。親としては、子供の身体が大きくなることや色々な言葉を覚えることなど、成長の速さに驚いています。特に、私は言葉を教える英語科の教師として、我が子がどのような言葉を覚えているのかについて興味があります。ある日、娘が「〇〇が好き」という言葉を覚えました。幼稚園に迎えに行ったときに、ほとんどの子供が「〇〇が好き」という話題で会話をしていました。そのとき、「今、幼稚園では自分が好きなことを話すことがブームになっているのだ」と気付きました。どの子供たちも生き生きとした表情で、好きな食べ物やキャラクターなどについて話していました。当たり前かもしれませんが、幼稚園の子供たちは、好きなことと嫌いなことを表現するときに、「〇〇が好き」のように、最初に好きなことをどのように伝えるのかを覚えます。特に、新しいものごとに出会ったときは目を輝かせながら、「〇〇が好き！」というように伝えてくれます。

さて、私は現在、中学校で英語科の授業を担当するとともに、小学4年生から6年生の外国語活動と外国語科の授業を担当しています。特に、小学4年生の児童は英語に触れることに新鮮さを感じており、毎回の授業で目を輝かせながら、「〇〇は英語で何て言うの?」「〇〇は英語で言っても、日本語で言っても同じだね!」と自分たちが学んだことを生き生きと発言してくれます。私が勤務している小学校では、ほとんどの児童が「英語が好き」「英語が楽しい」と言ってくれます。

国立教育政策研究所が令和6年7月に公表した令和6年度全国学力・学習状況調査の結果資料によると、「英語の勉強は好きだ」という質問に対して、小学6年生の児童の回答は「当てはまる」が71.2%で、「どちらかという当てはまる」が20.8%でした。およそ9割の児童が「英語が好き」ということが調査から分かります。現在、多くの小・中学校で外国語科・英語科における小中連携について実践をしていると思いますが、私自身は小学校と中学校の両方で英語を教える教師として、子供たちの「英語が好き」という気持ちを大切にしながら、日々、授業改善に努めていきたいと考えました。また、子供たちが目を輝かせながら、「英語が好き!」と自信を持って言えるように、これから学ぶ新しい教材や単元との出会いを大切にしたいと思います。

最後に、本誌の編集に当たり、先生方の全ての原稿を読ませていただきました。どの原稿も丁寧に御執筆いただいております。先生方の英語科の教師としての情熱を感じました。御執筆いただいた原稿から「英語が好き」という思いを感じました。

これからもこの『英語教育』が愛媛県の英語教師にとっての情報共有や新たな出会いの場の一つであり続けてほしいと願っております。今後とも御支援、御協力をよろしくお願いいたします。

2026年3月

松山市立日浦中学校
片山 信吾

出典：「令和6年度全国学力・学習状況調査報告書・調査結果資料」（国立教育政策研究所）
(<https://www.nier.go.jp/24chousakekkahoukoku/index.html>)（令和7年12月1日利用）